

富山市埋藏文化財調査報告 33

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ

—水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚—

2009

富山市教育委員会

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ

—水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚—

2009

富山市教育委員会



調査区全景（北から）



SD03 完堀（西から）



SK28 (SE01) 曲物出土状況



曲物



SK06 五輪塔（空風輪）出土状況



五輪塔（空風輪）



写真1 No. 1 内面

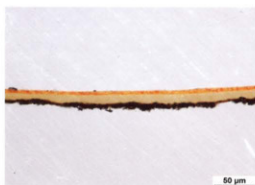


写真2 No. 1 内面の断面写真



写真3 No. 1 外面



写真4 No. 1 外面の断面写真



写真5 No. 2 内面

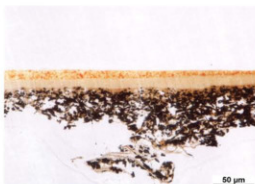


写真6 No. 2 内面の断面写真



写真7 No. 2 外面



写真8 No. 2 外面の断面写真



写真9 No. 3 内面



写真10 No. 3 内面の断面写真



写真11 No. 3 外面



写真12 No. 3 外面の断面写真



漆器 (S=1/2)



調査区遠景（北西から）



調査区近景（南東から）



遺構検出状況（南西から）



谷地形（SX01）の弥生土器等廃棄状況



完掘状況（南西から）



完掘状況（上が南）

例 言

- 1 本書は個人住宅建築に先立つ平成20年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会が主体となって実施した。調査費用については富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 3 本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・整理作業期間及び発掘調査面積は次のとおりである。
水橋上砂子坂遺跡 発掘作業 平成20年11月21日～平成20年12月25日 366.90 m²
(富山市水橋下砂子坂地内) 整理等作業 平成21年1月5日～平成21年3月27日
小竹貝塚 発掘作業 平成21年2月2日～平成21年3月27日 173.44 m²
(富山市呉羽町北地内)
- 4 調査担当者
水橋上砂子坂遺跡 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
主任学芸員 堀内大介
嘱託 小林高太・宮崎琢也・秋葉保香
小竹貝塚 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
主査学芸員 鹿島昌也、主任学芸員 小黑智久
嘱託 長谷部貞吾・宮崎琢也
- 5 現地発掘調査及び資料整理に際し、下記の諸氏、諸機関のご指導、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。(敬称略)
酒井重洋、宮田進一、四柳嘉章、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所、水橋下砂子坂町内会、呉羽昭和町町内会
- 6 理化学分析は株式会社古田生物研究所に委託し、その成果を本書「I 水橋上砂子坂遺跡 iv) 理化学的分析」に掲載した。
- 7 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、水橋上砂子坂遺跡を堀内・小林、小竹貝塚を堀内・宮崎・鹿島が担当し、各々の責は文末に記した。

凡 例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第七系に基づき設定したものである。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 遺構の表記は、以下のとおりである。
掘立柱建物：SB、溝：SD、井戸：SE、道路：SF、土坑：SK、ピット：SP、不明遺構：SX

目 次

カラー図版

I 水橋上砂子坂遺跡	1~38
i) 調査に至る経過	1
ii) 遺跡の位置と環境	1~3
iii) 調査の概要	4~23
iv) 理化学的分析	24~36
1 出土漆器の塗膜構造調査	24~25
2 出土木製品の樹種調査結果	25~33
3 放射性炭素年代測定	34~35
4 動物遺体(獣骨)の同定調査結果	36
v) 総括	37
引用・参考文献	
II 小竹貝塚	39~42
i) 調査に至る経過	39
ii) 遺跡の位置と環境	39~41
引用・参考文献	
iii) 調査の概要	42
iv) 総括	42
写真図版	
報告書抄録	63

I 水橋上砂子坂遺跡

i) 調査に至る経過

水橋上砂子坂遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年に富山市教育委員会が実施した分布調査で発見した遺跡である。遺跡は平成 5 年 3 月発行「富山市遺跡地図（改訂版）」に掲載され、周知の埋蔵文化財包蔵地（市№201256）として知られることとなった。また、同時期に富山県教育委員会が実施した北陸新幹線建設に伴う分布調査で遺跡範囲は拡張された。

平成 19 年 10 月 10 日、個人住宅建設（北陸新幹線建設に伴う移転）について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地全域 1,000 m²が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年 12 月 11 日に市教委による試掘確認調査を実施し、745 m²に遺跡の所在を確認した。調査では中世～近世の土坑・溝・ピット跡が検出され、中世の珠洲、近世の越中瀬戸・伊万里が出土した。

この調査結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、宅地部分の地盤改良工事及び擁壁の掘削工事が遺構面に達することから宅地部分と擁壁部分 366.90 m²について発掘調査を行なうこととなった。

発掘作業は平成 20 年 11 月 21 日から 12 月 25 日まで行った。同年 12 月 22 日に全景写真を撮影した。遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後平成 21 年 3 月 27 日まで行った。

ii) 遺跡の位置と環境

遺跡は、富山市の北東部に位置し、上市町と隣接している。遺跡に隣接して国道が南西から北東方向へ延びる。JR北陸本線水橋駅から南東へ約 2.7 km、富山地方鉄道本線相木駅から北へ 2.4 kmの富山市上砂子坂・下砂子坂地内に位置する。本遺跡は、白岩川右岸の扇状地上にあり、白岩川の支流番田川の右岸にある。標高は 7m前後である。

本遺跡の周辺には、白岩川の本支流及び上市川の河岸段丘間に形成された微高地上に、縄文時代から近世の各時代の遺跡が数多く存在する。

縄文時代には、後～晩期の水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、水橋金広・中馬場遺跡、小出城跡などが知られている。水橋金広・中馬場遺跡では、建物跡を作った集落が確認され、石冠や硬玉垂玉未成品が出土した〔富山市教育委員会 1997〕。

弥生時代には、特に後期において白岩川と上市川流域に新堀西遺跡（富山市）、清水堂南遺跡（富山市）、江上A遺跡（上市町）、魚射遺跡（滑川市）、浦田遺跡（舟橋村）等約 30 の遺跡が所在し、それらほとんどまって「ムラ」を形成し、それらを統括する「新川のクニ」というべき政治社会が形成されつつあった〔久々2001〕とされる。中でも新堀西遺跡では二重の環濠を廻らす集落遺跡であったことがわかりました〔財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 2008〕。また、清水堂南遺跡〔富山市教委 1999・2000〕や江上A遺跡〔上市町教委 1984〕では集落内で玉造りを行なったことが判明した。

古墳時代には、白岩川及び柳津川、寺田川流域に「白岩川流域古墳群」と呼ばれる〔立山町教委 1994〕古墳群が形成された。白岩川支流大岩川右岸の丘陵尾根上には前期古墳とされる柿沢古墳群が所在する〔上市町教委・富山大学考古学研究室 1993〕。

白岩川中流左岸には藤塚古墳（円墳、立山町）が所在し、平野部に至ると種尻塚古墳（県史跡、葺石・段築・周溝・周庭帯を有する円墳、立山町）や塚越古墳（円墳、立山町）、竹内天神堂古墳（前方後方墳、舟橋村）、清水堂大塚古墳（周溝を有する円墳、富山市）、若王子塚古墳（周溝を有する円墳、

富山市)、宮塚古墳(方墳、富山市)が現存する。

奈良～平安時代には、古代官衙跡(『延喜式』に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」と推定されている水橋荒町・辻ヶ堂遺跡が常願寺川河口近くに形成される。立山町浦田から舟橋村にかけての町村境周辺を「東大寺領大藪荘」比定地とする研究報告(藤田 1998)、その南に位置する辻遺跡(立山町)からは「射水」の文字が書かれた「里正」木簡が出土し、律令期の重要施設の存在が想定され、荘園施設との関連が目玉される。

中世になると、白岩川支流細川左岸に平城の仏生寺城(舟橋村)が築かれる。城主は越中五大将の一人細川曾十郎で室町幕府管領の細川一族とみられ、室町期に当地に所領を得て城郭を築き居城した。細川氏は松倉城(魚津市)城主の椎名氏に属していたとみられる。仏生寺城北方の竹内館(舟橋村)も仏生寺城の山城と考えられる。近年の発掘調査で仏生寺城は15世紀～16世紀前半に最も機能していたことが判明し、その後は廃城となったようである[舟橋村教委 2001]。

天正年間になると、小出城が築かれる。安土桃山時代の天文 14(1545)年から天正 11(1583)年までの間、古文書に見える城で戦国期の越中において、上杉氏と織田氏の攻防戦の中で重要な位置を占める城であった。佐々成政の越中平定後、廃城となったと伝えられている。これまで城の場所は特定されていなかったが、近年の発掘調査によって、小出神社の北側約 200mの範囲に所在することがほぼ特定された。その範囲は南北 270m、東西 150mであると推定された。出土する遺物には多数の漆器を含む木製品のほか、中国製の青磁の鉢、白磁の壺、硯、土師器の灯明皿などがあり、中でも土製弾丸の出土は当時の戦跡を示すものである[富山市教委 2007]。

小山城南方に水橋専光寺遺跡や水橋金広・中馬場遺跡などの集落遺跡が存在する。水橋専光寺遺跡は、平行・直交・L字形に走る区画溝に囲まれた中に多数の井戸・柱穴等が検出され、「掘立柱建物を主体とする集落」とされている[富山市教委 2005・2008]。

水橋金広・中馬場遺跡では、市教委が調査した西側南部で中世前期を主体とする大溝で区画された館跡が検出され、出土遺物等から村落領主クラスの館跡と推測された。特に安土桃山時代の土坑からは、厚板状の双六盤が国内で初めて遺跡から完全な形で出土した。西側北部では中世後期～近世初期を主体とする大溝で区画された館跡が検出され、出土遺物にヤスを線刻した木摺目、金属製のヤスなどがあり、中世末から近世にかけて河川漁にかかわる生業が営まれていた館跡と推測された[富山市教委 2001・2006]。また、新幹線建設予定地(市教委の発掘した調査区の西 60m、東 410mの範囲)の調査においても、中世前期の区画溝や掘立柱建物が検出されている[県財団埋文事務所 2008]。

表 1 遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	水橋上砂子館遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	11	水橋石割遺跡	敷布地	奈良・平安・中世	21	水橋中馬場遺跡	塚?	中世～近世
2	水橋下砂子館遺跡	敷布地	平安・中世	12	水橋石割石遺跡	敷布地	中世	22	舟橋手塚古墳	古墳	古墳
3	水橋下砂子館穿	塚?	中世～近世	13	水橋石割石遺跡	敷布地	奈良・平安	23	宮塚古墳	古墳	古墳・中世・近世
4	水橋小出遺跡	館跡	縄文・奈良・平安・中世	14	水橋石割石遺跡	敷布地	中世?	24	舟橋水鏡人遺跡	集落	奈良・古墳・中世・近世
5	小出城跡	城跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	15	水橋平塚遺跡	敷布地	奈良・平安・中世	25	津波宮内遺跡	集落・古墳	奈良・古墳・奈良・平安・中世・近世
6	水橋大正遺跡	敷布地	平安・中世・近世	16	舟橋遺跡	敷布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	26	津波宮内遺跡	古墳	古墳
7	水橋池田館遺跡	敷布地	古墳・平安・中世・近世	17	水橋北馬場遺跡	敷布地	平安・中世・近世	27	津波宮内深田遺跡	集落	平安・中世・近世
8	水橋専光寺遺跡	集落	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	18	水橋船伏遺跡	敷布地	縄文・弥生・奈良・平安・近世	28	津波宮内遺跡	集落	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
9	水橋専光寺遺跡	敷布地	弥生・奈良・平安	19	船伏・佐野村遺跡	敷布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	29	津波宮内遺跡	集落・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
10	水橋石割遺跡	敷布地	奈良・平安	20	水橋金広・中馬場遺跡	集落・古墳・城跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	30	津波宮内平塚遺跡	集落	奈良・平安・近世



第1図 周辺の遺跡位置図 (1/20,000) 及び調査対象地位置図 (1/5,000)

iii) 調査の概要

1. 調査概要

(1) 調査の方法

調査は、重機で表土を除去し、その後ジョレンを用いて遺構検出作業を行い、人力で遺構掘削作業を行った。

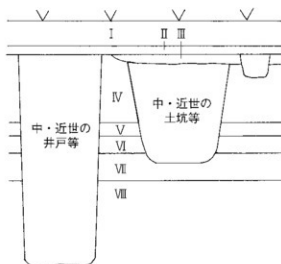
掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施した。平面図はトーチ煙ステーションによる計測を基本として1/20で作成し、必要に応じて1/10の微細図を併せて作成した。写真撮影は必要に応じて随時行い、白黒35mm、カラー35mm、白黒6×7版、カラー6×7版の4種類のフィルムに記録した。

(2) 基本層序

調査区の層序は、上から水田耕作土（I層）、水田床土（II層）、遺物包含層（III層）、地山（IV～VIII層）の順である。

I層は黒褐色粘質土である。II層は黄褐色土である。III層はにぶい黄褐色土～褐灰色土である。調査区全域に不均一に堆積する。わずかに遺物を包含する。IV層はにぶい黄褐色（明赤褐色）砂質土、V層は褐灰色粘質土、VI層は灰黄褐色粘質土、VII層は黒色粘質土（木質混じり）、VIII層は黄褐色粘質土である。

遺構は、III層上面及びIV層上面で検出した。



第2図 基本層序図

2. 遺構

(1) 掘立柱建物（第4図、写真図版1）

SB01 調査区北東部（X433～438、Y030～038）で検出した。東西3間×南北1間（以上）の東西棟の建物である。桁行北筋で6.3m、梁行東筋（検出長）で2.9mを測る。柱間寸法は桁行北筋西から2.05m、4.25m（南筋2.50m+1.75m）である。主軸方向はN-8°-Eで、後述する区画溝SD06を意識した配置となっている。SP31から珠洲が出土している。

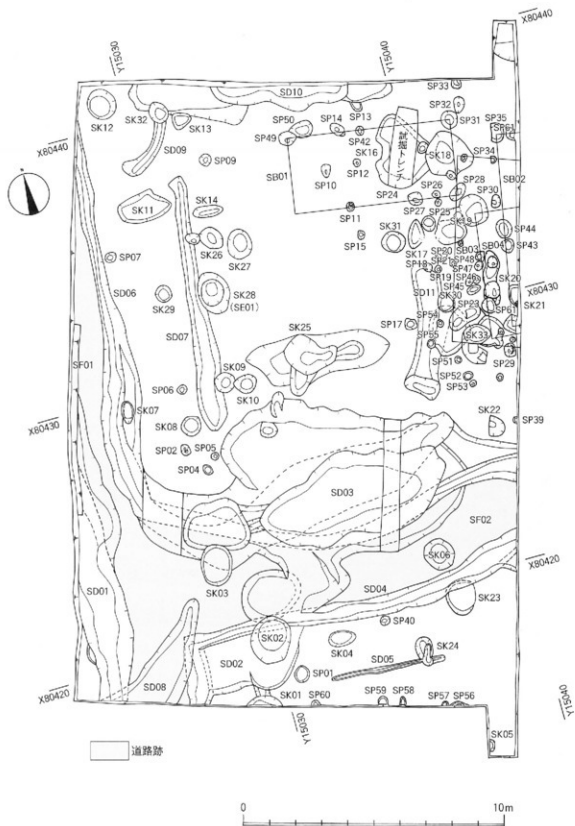
SB02 調査区北東部（X428～438、Y036～039）で検出した。東側は調査区外に延びるため、不明である。東西不明・南北2間の建物である。西筋で7.2mを測る。柱間寸法は3.60m間隔を測る。主軸方向はN-11°-Eで、ほぼSB01に平行している。

SB03 調査区東部中央（428～437、Y034～038）で検出した。東側は調査区外に延びるため、不明である。東西不明・南北2間の建物である。西筋で7.1mを測る。柱間寸法は北から3.00m、4.10mを測る。主軸方向はN-18°-Eである。SK18・SK33から柱根（第14図70・71）が出土している。

SB04 調査区東部中央（X428～434、Y035～038）で検出した。東側は調査区外に延びるため、不明である。東西不明・南北1間の建物である。西筋で4.7mを測る。主軸方向はN-9°-Eである。

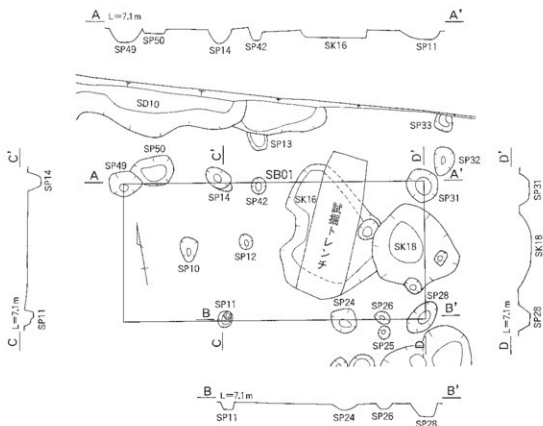
(2) 溝（第5～9図、写真図版2～5）

SD01 調査区南西部（X418～432、Y022～026）で検出したほぼ南北に伸びる溝である。SD08より古い。新田2時期あると思われる、主軸方向はN-5°-E（古）、N-3°-E（新）である。幅は1.20～1.80

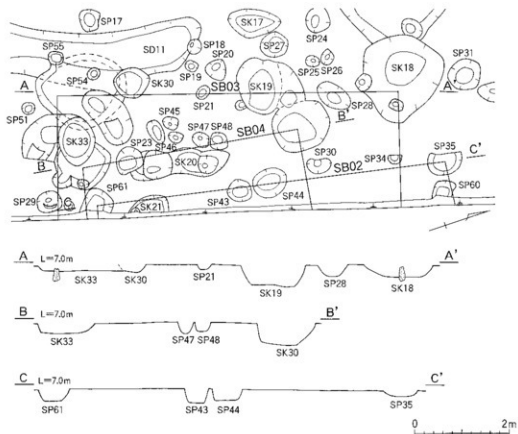


第3図 水橋上砂子坂遺跡全体遺構平面図 (S=1/160)

SB01



SB02・03・04



第4図 掘立柱建物平面図及びエレベーション図 (S=1/80)

表2 溝一覧表

番号	方向	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SD01	N-5° -E(古) N-3° -E(新)	(12.1)	1.20~1.80	0.16~0.34	須恵器、古代土師器、中世土師器、木製品(漆器)、炭	SD08より古い、新旧2時期ある。
SD02	N-51° -E~ N-78° -E	(6.0)	2.30~3.50	0.12~0.26	須恵器、中世土師器、珠洲、木製品(弓状木製品)	SD04・08、SK02より古い
SD03	N-96° -E	(9.6)+(9.3)	1.20~6.30	0.33~0.50	須恵器、古代土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、八尾、越中瀬戸、伊万里、木製品(漆器、曲物底板、木札、木枕)、炭化材、フイゴの羽口、鉄滓、被熱礫	SD06・SK03より古い
SD04	N-10° -E~ N-80° -E	(13.0)+(2.2)	0.50~1.05	0.25	須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、被熱礫	SD02より新しい、SD08・SK02より古い
SD05	N-95° -E	4.3	0.20	0.08		SK24より古い
SD06	N-6° -W~ N-77° -E		0.40~1.10	0.10~0.30	中世土師器、瀬戸美濃	SD03より新しい、SK07より古い
SD07	N-7° -E	9.9	1.05~1.55	0.16~0.28	珠洲	SK09・26・28より古い
SD08	N-41° -E	(4.3)	0.60~2.00	0.11~0.30	越中瀬戸、近世磁器	SD01・02・04より新しい
SD09	N-25° -E~ N-42° -E	2.4	0.45	0.06		SK32より古い
SD10		(10.1)	1.40以上	0.44	中世土師器	SK13・32より古い
SD11	N-21° -E	5.3	0.70	0.08	鉄滓	SK33より新しい、SP54・55より古い

表3 土抗一覧表

番号	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
SK01	円形	1.4	0.40以上	0.36		南側は調査区外
SK02	楕円形	1.75	1.60	0.50	越中瀬戸	SD02・04より新しい
SK03	楕円形	1.60	1.20	0.80	越中瀬戸	SD03より新しい
SK04	長楕円形	1.10	0.60	0.23		
SK05	方形	0.45	0.15以上	0.13		
SK06	円形	1.20	—	0.72	珠洲、越前、越中瀬戸、五輪塔(空黒輪)、被熱礫	西側は調査区外 SD04より新しい
SK07	楕円形	0.85	0.45	0.10	炭化材、骨	SD06より新しい
SK08	円形	0.75	—	0.36		
SK09	円形	0.70	—	0.32		SK10より古い
SK10	楕円形	0.90	0.70	0.24		SK09より新しい
SK11	不整形	2.05	1.10	0.05		
SK12	円形	1.90	—	0.28		
SK13	不整形長方形	0.45	0.40	0.12		SD10より新しい
SK14	長楕円形	1.20	0.45	0.25		
SK18	不整形	3.00(推定)	2.00(推定)	0.10~0.22		SK18より古い
SK17	不整形楕円形	1.15	0.65	0.08		
SK18	不整形楕円形	0.90	0.70	0.31	柱根	SB03、SK16より新しい
SK19	不整形	2.35	1.20	0.45	鉄滓	SB03・04
SK20	不整形	2.40	0.55	0.20~0.28	珠洲、越中瀬戸	
SK21	不整形長方形	0.85	0.35以上	0.08		
SK22	楕円形	0.60以上	0.75	0.12		
SK23	楕円形	1.35	1.15	0.10		SD04より新しい
SK24	不整形長方形	1.15	0.50	0.14		SD05より新しい
SK25	不整形	5.60	0.95	0.27	炭	
SK26	楕円形	1.00	0.75	0.23		SD06より新しい
SK27	楕円形	1.15	0.95	0.20	珠洲	
SK28 (SF01)	楕円形	1.65	1.20	1.32	曲物、横棧、炭	井戸、SD07より新しい
SK29	円形	0.60	—	0.20		
SK30	楕円形	0.75	0.65	0.18		SK33より新しい
SK31	楕円形	0.95	0.80	0.18		
SK32	楕円形	0.85	0.65	0.24		
SK33	不整形	1.85(推定)	1.50	0.12~0.37	須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、柱根	SD09・10より新しい SB03・04、SK30・SP54・55より古い

m、深さ0.16～0.34mを測る。覆土から古代土師器、須恵器、中世土師器皿、漆器椀が出土している。
SD02 調査区南部中央 (X418～423、Y023～034) で検出した調査区中央南よりでSD03 から分かれ、北東から南西方向に伸びる溝である。SD04・08、SK02より古い。幅は2.30～3.50m、深さ0.12～0.26mを測る。覆土から須恵器、珠洲、弓状木製品が出土している。

SD03 調査区中央南より (X422～429、Y025～040) で検出した東西方向に伸びる人溝である。主軸方向はN-96° -Eである。幅は1.20～6.30m、深さ0.33～0.50mを測る。溝の中央部が長軸7.5m、短軸3.5m、深さ0.50mの深い不整形な長楕円形で、断面形が逆台形状に掘り込まれている。その後、長軸9.5m、短軸5.5m、深さ0.33mの浅い楕円形で、浅い逆台形状に掘り込まれている。溝の南側の肩部 (X423、Y032) で焼けて炭化した丸木が出土し、その周辺は広範囲に炭化物が広がっていた。肩部に打ち込まれた杭はその際に被熱したと考えられ、上部が焼け焦げていた。覆土から須恵器、古代土師器、中世土師器皿、珠洲、瀬戸美濃、八尾、越中瀬戸、木製品 (漆器椀、曲物底、木札、木杭、炭化材)、鉄滓、羽口、被熱礫が出土している。SK33 覆土中の遺物と接合する遺物 (珠洲甕の胴部片) が1点出土した。西側 (X423、Y037) の地点で出土した越中瀬戸 (25～27) は、多数の礫とともに出土しており、何らかの遺構であった可能性がある。

SD04 調査区南部 (X418～422、Y026～040) で検出した東西方向から南北方向に伸びるL字状の溝である。東西方向はSD06の東西方向、南北方向はSD01(新)に並走する。SD02より新しく、SD08・SK02より古い。主軸方向はN-10° -E～N-80° -Eである。幅は0.50～1.05m、深さ0.25mを測る。覆土から須恵器、中世土師器皿、珠洲、越中瀬戸、被熱礫が出土している。越中瀬戸は溝の検出面での出土であり、後世の混ざり込みと考えられる。

SD06 調査区北西から中央東 (X422～442、Y025～040) で検出した南北方向から東西方向に伸びるL字状の溝である。南北方向はSD01(新)に、東西方向はSD04の東西方向に並走する。SD03より新しい。主軸方向はN-6° -W～N-77° -Eである。幅は0.40～1.10m、深さ0.10～0.30mを測る。覆土から中世土師器皿、瀬戸美濃が出土している。

SD07 調査区北西から中央 (X427～439、Y030～033) で検出した南北方向に伸びる溝である。SD06の南北方向に並走する。SK09・SK28・SK26より古い。主軸方向はN-6° -Eである。幅は0.55～1.05m、深さ0.16～0.28mを測る。覆土から珠洲が出土している。

SD08 調査区南側 (X418～422、Y023～028) で検出した北東から南西方向に伸びる溝で、南西方向に向かって広く深くなる。SD01・02・04より新しい。主軸方向はN-41° -Eである。幅は0.60～2.00m、深さ0.11～0.30mを測る。覆土から越中瀬戸、近世磁器が出土している。

(3) 道路 (第3区)

SF01 SD01(新)とSD04・SD06の南北方向を側溝とした道路である。道幅は1.0m～2.0mを測る。

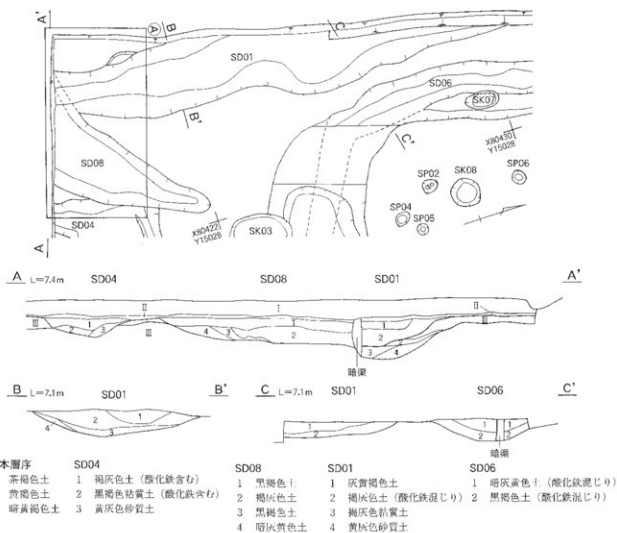
SF02 SD04・SD06の東西方向を側溝とした道路である。道幅は2.2m～2.3mを測る。

(4) 土坑・井戸 (第8～11区、写真図版3・6・7、カラー図版2～4)

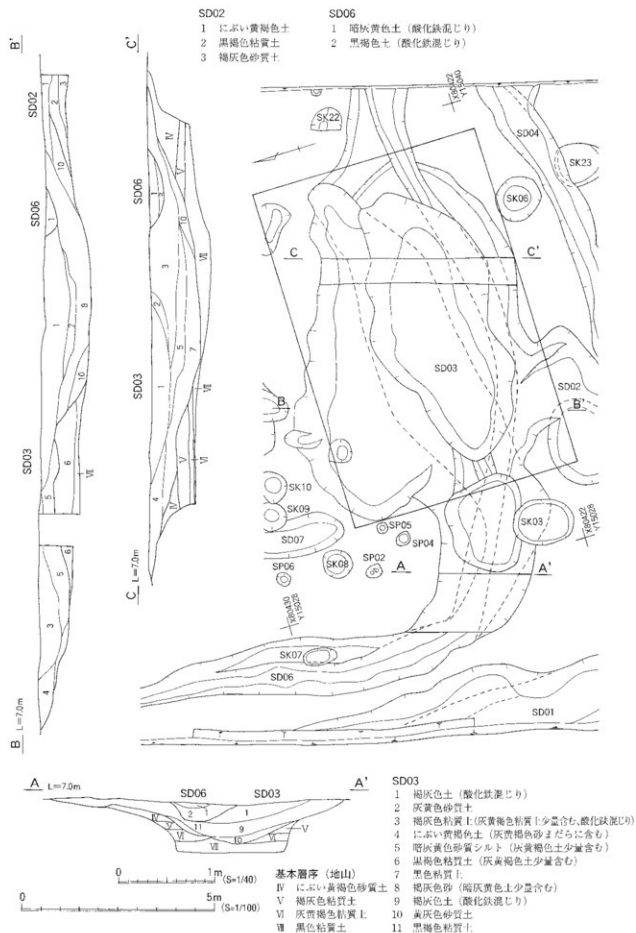
SK02 調査区南部中央 (X420、Y030) で検出した。SD02・04より新しい。長軸1.75m、短軸1.60mの楕円形を呈し、深さ0.50mを測る。覆土から越中瀬戸が出土している。

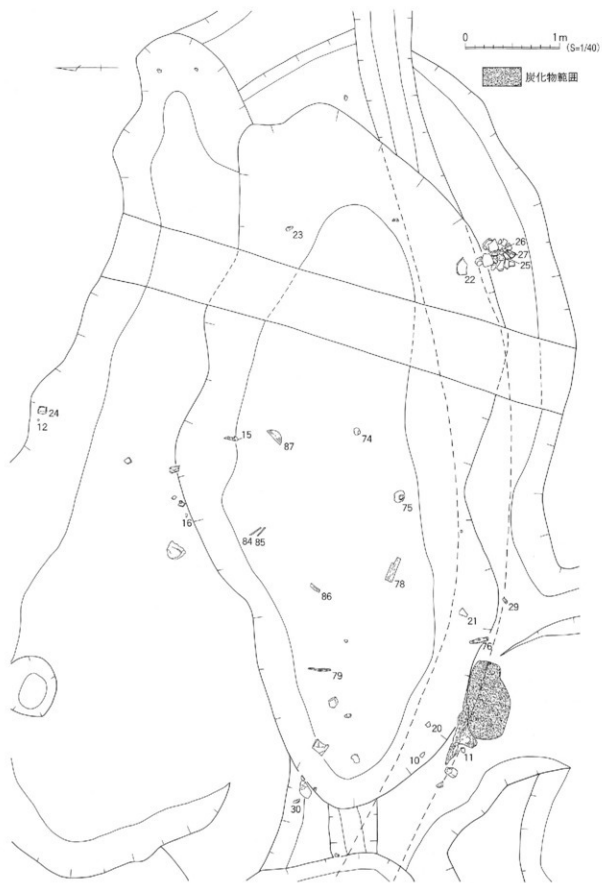
SK03 調査区南部中央 (X423、Y029) で検出した。SD03より新しい。長軸1.60m、短軸1.20mの楕円形を呈し、深さ0.40mを測る。覆土から越中瀬戸が出土している。

SK06 調査区南東部 (X421、Y037) で検出した。SD04より新しい。直径1.20mの円形を呈し、深さ0.72mを測る。土坑内には多数の礫が混入している。中心部に被熱痕のある礫が多い。最下層から五

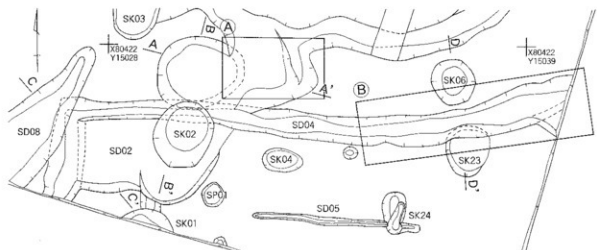


第5図 SD01・08平面図 (S=1/100) 及び断面図、遺物出土図 (S=1/40)

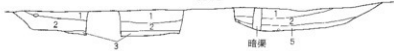




第7図 SD03遺物出土図 (S=1/40)



A L=7.1m



- SD02
 1 灰黄褐色土
 2 黑褐色粘質土
 3 褐灰色砂質土
 4 灰褐色粘質土
 5 黑褐色粘質土
 6 褐色灰土(酸化鉄、炭化物含む)

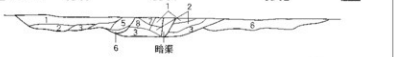
B L=7.1m



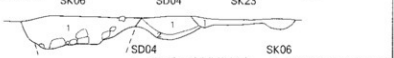
- SK02
 1 暗灰黄色土(酸化鉄混じり)
 2 褐灰色粘質土

- SD08
 1 黑褐色土 5 褐色土
 2 褐灰色土 6 灰黄褐色砂質土
 3 黑褐色土 7 灰黄褐色土
 4 暗灰黄色土 8 褐色土

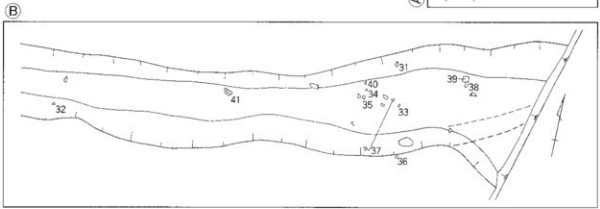
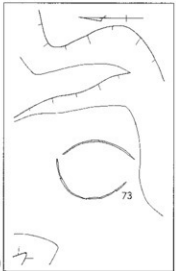
C L=7.1m



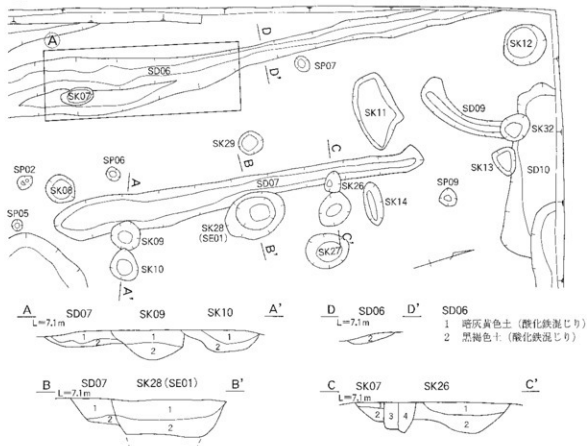
D L=7.2m



- SD04
 1 褐灰色土(酸化鉄含む)
 2 黑褐色粘質土(酸化鉄含む)
 3 灰褐色砂質土
- SK06
 1 灰黄褐色土(酸化鉄含む)
 SK23
 1 暗灰黄色土



第8図 SD02・04、SK02平面図(S=1/100)及び断面図、遺物出土図(S=1/40)



SD07

- 1 灰褐色粘質土（酸化鉄混じり）
- 2 褐灰色粘質土（灰白色砂質土を多く含む）

SK09

- 1 褐灰色粘質土（酸化鉄混じり）
- 2 褐灰色粘質土（にぶい黄褐色砂質土多く含む）

SK10

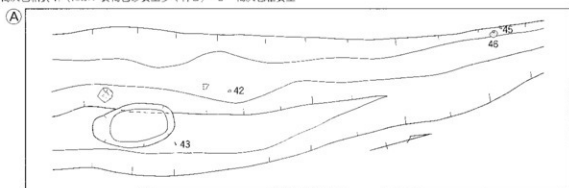
- 1 灰黄褐色粘質土（酸化鉄混じり）
- 2 褐灰色粘質土（酸化鉄混じり）

SK28 (SE01)

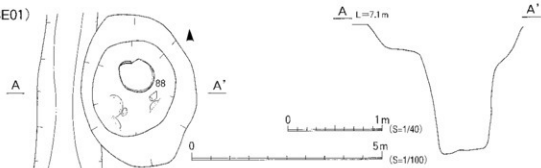
- 1 暗褐色粘質土（酸化鉄混じり）
- 2 褐灰色粘質土

SK26

- 1 褐灰色粘質土
- 2 灰黄色砂質土（褐灰色粘質土少量含む）
- 3 褐灰色粘質土（にぶい黄褐色砂多く含む）
- 4 褐灰色粘質土（にぶい黄褐色砂まだらに含む）

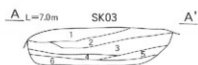
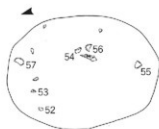
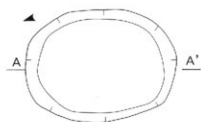


SK28 (SE01)



第9図 SD06・07、SK28 (SE01) 平面図 (S=1/100) 及び断面図、遺物出土図 (S=1/40)
SK28 (SE01) 遺物出土図及びエレベーション図 (S=1/40)

SK03

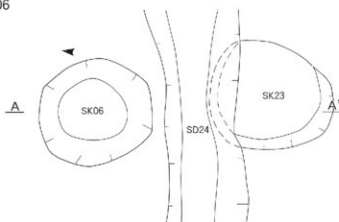


SK03

- 1 暗褐色土
- 2 にぶい黄褐色粘質土
- 3 褐灰色粘質土
- 4 灰黄褐色土
- 5 褐灰色土
- 6 黄灰色粘質土

0 50cm (S=1/20)
1m (S=1/40)

SK06



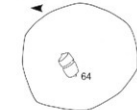
礫出土上層



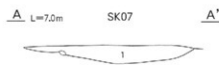
礫出土下層



最下層



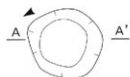
SK07



SK07

- 1 暗褐色粘質土・炭化物混ざり(粘土、骨片含む)

SK08



SK08

- 1 にぶい黄褐色土(酸化鉄混じり)
- 2 黄灰色砂質土

SK29

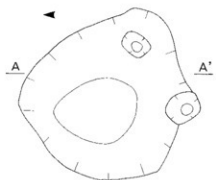


SK29

- 1 灰黄色土(酸化鉄混じり)
- 2 灰黄色土

第10図 SK03・06・08・29平面図及び断面図、SK03・06遺物出土図 (S=1/40)
SK07平面図及び断面図、遺物出土図 (S=1/20)

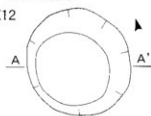
SK18



SK18

- 1 灰黄褐色粘質土 4 明黄褐色砂質土
2 にぶい黄褐色粘質土 5 灰黄褐色砂質土
3 褐色灰色粘質土

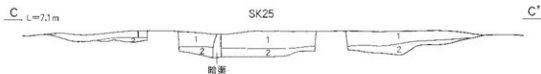
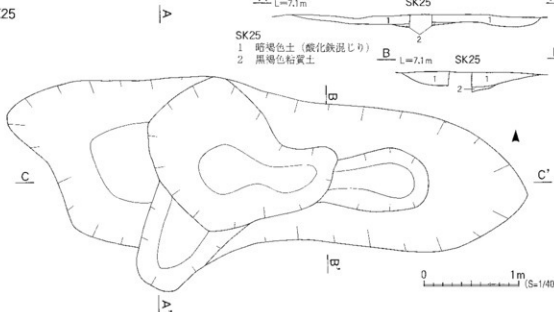
SK12



SK12

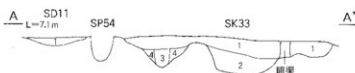
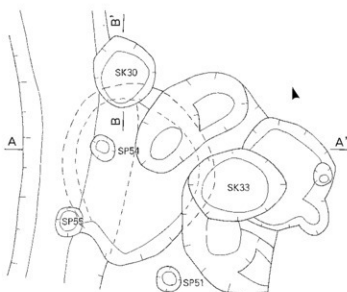
- 1 褐灰色粘質土 (酸化鉄混じり)
2 褐灰色粘質土

SK25



暗渠

SK30・33



SK30

SK33

- 1 細灰色土 (酸化鉄混じり)
2 にぶい黄褐色砂質土 (褐灰色粘質土少量含む)
3 黒褐色粘質土
4 褐色土 (細灰色砂含む)

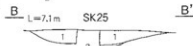
SD11

- 1 灰黄褐色土



SK25

- 1 暗褐色土 (酸化鉄混じり)
2 黒褐色粘質土



SK25

第11図 土坑平面図 (S=1/40)

- 輪塔の空風輪（第13図64）が出土した。その他、覆土から珠洲、越前、越中瀬戸が出土している。
- SK07** 調査区中央部西側（X427、Y030）で検出した。SD06より新しい。長軸0.85m、短軸0.45mの楕円形を呈し、深さ0.10mを測る。覆土は炭化材・土・骨で埋まっている。出土した炭化材をAMS法で年代測定した結果、約400年前（1600年前後）であった。出土した骨は同定の結果、人骨であると分かった。この場所に穴を掘り、火葬されたと思われる。
- SK08** 調査区西部中央（X429、Y029）で検出した。直径0.75mの円形を呈し、深さ0.80mを測る。
- SK09** 調査区中央部（X430、Y030）で検出した。SD07より新しく、SK10より古い。直径0.70mの円形を呈し、深さ0.32mを測る。
- SK10** 調査区中央部（X430、Y031）で検出した。SK09より新しい。長軸0.90m、短軸0.70mの楕円形を呈し、深さ0.23mを測る。
- SK12** 調査区北西端（X441、Y029）で検出した。直径1.10mの円形を呈し、深さ0.28mを測る。
- SK18** 調査区北東部（X436、Y042）で検出した。SK16より新しい。長軸0.90m、短軸0.70mの楕円形を呈し、深さ0.31mを測る。柱根（第14図70）を検出した。
- SK26** 調査区北西部（X435、Y032）で検出した。長軸1.00m、短軸0.75mの楕円形を呈し、深さ0.23mを測る。
- SK28 (SE01)** 調査区北西部（X433、Y032）で検出した。長軸1.65m、短軸1.20mの楕円形を呈し、深さ1.32mを測る。底から水溜として利用した曲物（第15図88）が出土した。横棧（第15図89）や板材と思われる腐食した井戸部材が出土しており、木組井戸であったと考えられる。
- SK29** 調査区北西部（X434、Y030）で検出した。直径0.65mの円形を呈し、深さ0.28mを測る。
- SK33** 調査区東部中央（X429、Y041）で検出した。長軸2.90m、短軸2.35mの不整形を呈し、深さ0.23mを測る。柱根（第14図70）を検出した。

3. 遺物（第12～16図、写真図版8・9、カラー図版3）

（1）土器・陶磁器・その他の遺物（第12～14図、写真図版8～9、カラー図版3）

- SP31** 1は珠洲の播鉢で、口縁内面に櫛目波状文がある。吉岡編年V期〔吉岡1994〕に相当し、14世紀後半～15世紀中頃に属する。
- SK33** 2は須恵器の杯蓋のつまみである。3は非ロクロ成形の中世土師器皿である。内彎する口縁で端部を鋭く仕上げる。内外面に煤が付着しており、灯明皿に転用している。
- SK19** 4は鉄滓である。57.58gを測る。
- SD01** 5・6は非ロクロ成形の中世土師器皿である。5は丸底の底部から口縁部が大きく外反し、口縁端部を鋭く仕上げる。外面に油煙が付着しており、灯明皿に転用している。6は体部が浅く開き、外反する体部を持ち、口縁端部は鋭く仕上げる。
- SD02** 7は珠洲の播鉢で、口縁内面に櫛目波状文がある。吉岡編年V期に相当する。
- SD03** 8は古代土師器の甕である。口縁部は外傾し途中で端部を巻き込む。内面には巻き込みの段がつく。9世紀後半に属する。9～18は非ロクロ成形の中世土師器皿である。9～11は丸底気味の底部に口縁部が短く内彎する。12～16は、体部が浅く開き、外反する体部を持ち、口縁端部は鋭く仕上げる。17・18は、外反する体部を持ち、口縁端部は鋭く仕上げる。14・15は内外面に、16は外面に煤が付着しており、灯明皿に転用している。16世紀中頃～後半に属する。19～24は珠洲である。19は甕の口縁部である。吉岡編年V期に相当する。20～22は甕の胴部片である。23は甕である。吉岡編年V期に相当する。24は甕の胴部片である。外面がひび割れており、漆継補修の跡が見られる。25～27は越中瀬戸である。25は、丸皿である。内底面は内禿げである。高台は削り出し高台である。内底面

SP31 (1)

SK33 (2·3)

SK19 (4)

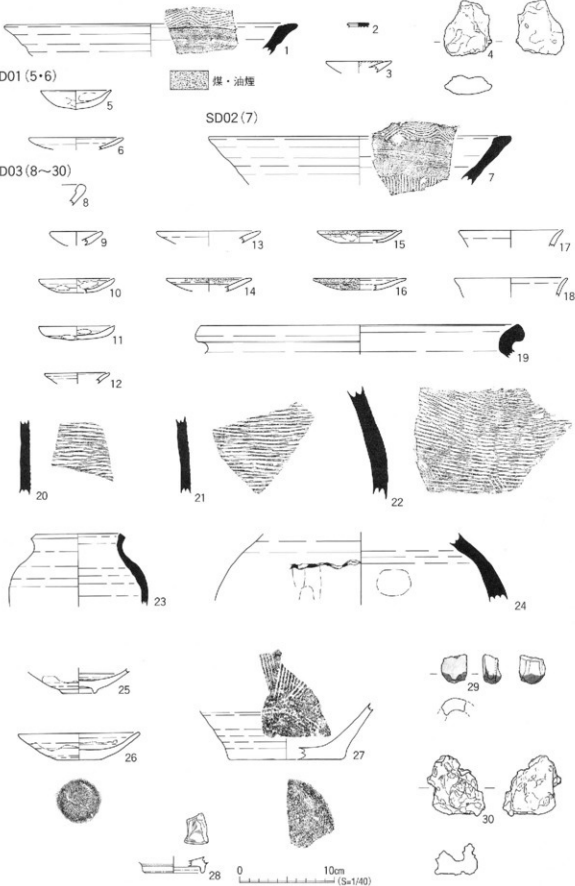
SD01 (5·6)

煤・油煙



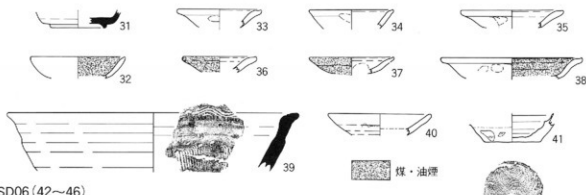
SD03 (8~30)

SD02 (7)

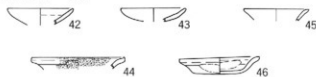


第12図 水橋上砂子板遺跡出土遺物実測図 (1)

SD04 (31~41)



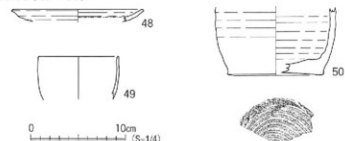
SD06 (42~46)



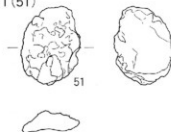
SD07 (47)



SD08 (48~50)



SD11 (51)



第13図 水橋上砂子坂遺跡出土遺物実測図(2)

外底面に重ね焼きの砂目が残る。内外面に灰釉が施される。宮田編年Ⅰ期〔宮田 2007〕に相当し、16世紀末～17世紀初めに属する。26は糸切り皿である。内底面は内売げである。鉄軸が口縁部の内外面に施される。内面に灯心痕と思われる煤が付着しており、灯明皿に転用している。宮田編年Ⅰ期に相当する。27は播鉢の底部である。底部に回転糸切り痕が認められる。鉄軸が内外面に施される。28は伊万里の皿である。内面の見込みに草木文が描かれている。29はフィゴの羽口である。30は鉄滓である。106.97gを測る。

SD04 31は須恵器の杯B底部である。32～38は非ロクロ成形の中世土器器皿である。32は内彎する口縁で端部は丸くおさめる。内面には煤が付着しており、灯明皿に転用している。33～38は外反する体部を持ち、口縁端部を小さくつまみあげる。32・38は内面に、36・37は外面に煤が付着しており、灯明皿に転用している。16世紀後半に属する。39は珠洲の播鉢で、口縁内面に櫛目波状文がある。吉岡編年Ⅴ期に相当する。40・41は越中瀬戸である。40は丸皿で、内面には軸止めの段がある。鉄軸が内外面に施される。宮田編年Ⅰ期に相当する。41は壺の底部である。外面に薄い灰釉が施される。

SD06 42～46は非ロクロ成形の中世土器器皿である。42・43は内彎する口縁で端部は丸くおさめる。44は外反する体部を持ち、口縁端部を小さくつまみあげる。内外面には煤が付着しており、灯明皿に転用している。45・46は平底の底部から外反する体部を持ち、口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさめる。16世紀後半に属する。

SD07 47は珠洲の播鉢である。吉岡編年Ⅴ期に相当する。

SD08 48・49は越中瀬戸である。48は丸皿で、内面には軸止めの段がある。鉄軸が口縁部内外面に施される。宮田編年Ⅰ期に相当する。49は、水指の底部である。底部に回転糸切り痕が認められる。

内外面に鉄軸が施される。50は近世磁器の碗である。

SD11 51は鉄滓である。175.61gを測る。

SK03 52～57は越中瀬戸である。52は丸皿である。内底面は内禿げである。内面には軸止めの段がある。灰釉が口縁部内外面に施される。53～57は水指の底部である。底部に回転系切り痕が認められる。底部に煤が付着しており、火にかけられていたと考えられる。

SK06 58・59は珠洲である。58は甕の底部で、59は播鉢の底部である。60は越前の甕の体部である。61～63は越中瀬戸である。61は丸皿で、内面に軸止めの段がある。内底面は内禿げで、十六弁菊の印花文が入る。高台は削り出し高台である。灰釉が内外面に施される。宮田編年I期に相当する。62・63は丸碗の底部である。高台は輪高台である。62は灰釉、63は錆釉が内外面に施され、外面体部下半から高台にかけては露胎である。63の同一個体がSK03で出土している。宮田編年I期に相当する。64は五輪塔の空風輪で、側面に面を持つ。角閃石安山岩製である。15世紀後半～16世紀に属する。

包含層 65は非ロクロ成形の中世土師器皿である。外反する体部を持ち、口縁端部を小さくつまみあげる。66は瀬戸美濃の碗である。67・68は伊万里の碗である。69は越中瀬戸の碗である。

(2) 木製品 (第15～16図、写真図版10、カラー図版2・4・5)

SK18 70は柱根である。現存長31.0cm、底径11.4×9.7cmを測る。材はブナ科クリ属クリ。

SK33 71は柱根である。現存長27.9cm、底径14.8×13.5cmを測る。材はブナ科クリ属クリ。

SD01 72は漆器の椀である。口縁部が内彎気味に立ち上がる。内外面黒色漆塗りの椀で、内外面に「草文」が赤色漆で描かれる。材はトチノキ科トチノキ属トチノキ。

SD02 73は弓状木製品である。細い心持丸木の部を弓状に曲げ、端部に切り込み加工を施し、表面は部分的に面取りを行なっている。後世の暗渠排水掘削の際に真つ二つに切られている。長さ183cm、最大径2.2cmを測る。材はイヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ。

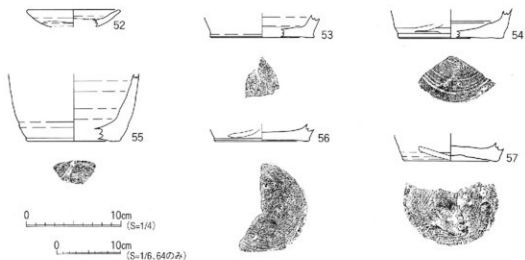
SD03 74・75は漆器の碗である。低い高台に口縁部が内彎気味に立ち上がる。口縁部は歪んでいる。74は内外面黒色漆塗りの椀で、内底面に「宝珠文」、内側面に「花文？」が3箇所赤色漆で描かれる。外面は不明である。材はブナ科ブナ属。75は内外面黒色漆塗りの椀で、内底面に「宝珠文」、内側面に「亀甲花文」が3箇所赤色漆で描かれる。外面は不明である。材はブナ科ブナ属。74・75は同様の文様が描かれており、対となるものと考えられる。76は木杭である。先端は斜めに削ってある。杭の上部は被熱して焼け焦げている。現存長54.8cm、最大径は5.0cmを測る。材はヒノキ科アスナロ属。

77～87は木札である。77は12.0×2.2×0.6cmを測る。中央に孔が1箇所開けられている。片面が被熱して焼け焦げている。78は27.6×7.0×0.2cmを測る。刃物痕をとどめており、組板に転用されたものと思われる。材はヒノキ科アスナロ属。79は24.5×2.5×0.5cmを測る。材はスギ科スギ属スギ。

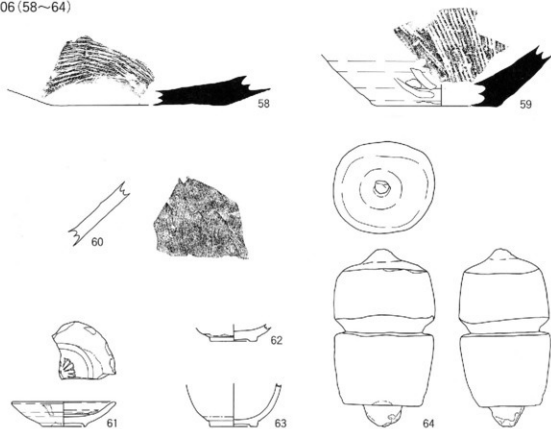
80は12.3×3.6×0.1cmを測る。材はヒノキ科アスナロ属。81は12.1×3.1×0.1cmを測る。82は10.7×4.0×0.2cmを測る。83は9.7×2.7×0.2cmを測る。84は12.5×1.8×0.1cmを測る。85は13.6×1.7×0.1cmを測る。86は17.8×3.3×0.1cmを測る。材はヒノキ科アスナロ属。87は曲物底板である。周縁に結合孔が3箇所開けられている。刃物痕をとどめており、組板に転用されたものと思われる。材はヒノキ科アスナロ属。

SK28 (SE01) 88は水溜として使用された円形の曲物である。側面縁に底板固定用の木釘穴がある。上下縁に帯をはめると考えられるが、上部は腐食して残存していなかった。焚火などであぶって曲げる「燻め曲げ」によって製作された可能性がある。材はヒノキ科ヒノキ属。89は井戸部材の横棧である。仕口の加工はされていないが、畚状の圧迫痕があり、何か紐状のもので留められていた可能性がある。腐食しており、全て残存していない。17.4×5.4×1.9cmを測る。

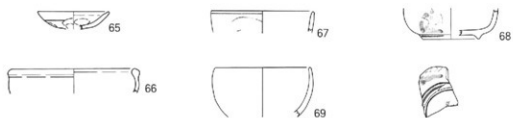
SK03 (52~57)



SK06 (58~64)



包含層 (65~69)



第14図 水橋上砂子坂遺跡出土遺物実測図(3)

SK18 (70)



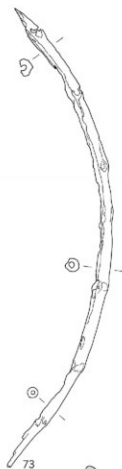
SK33 (71)



SD03 (74~77)



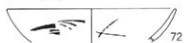
SD02 (73)



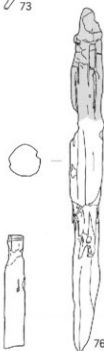
0 10cm (S=1/4)

0 10cm (S=1/6, 70~71・73~76)

SD01 (72)

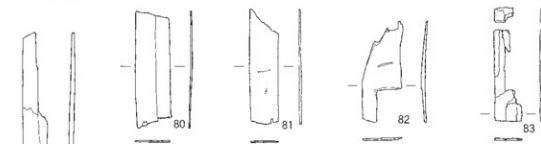
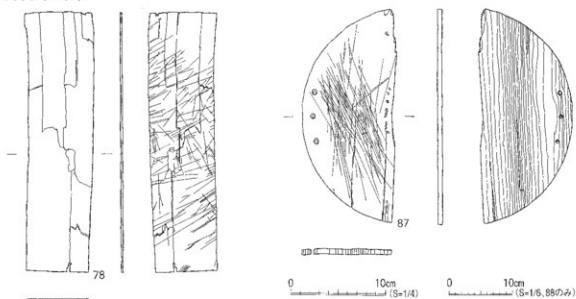


被熱痕

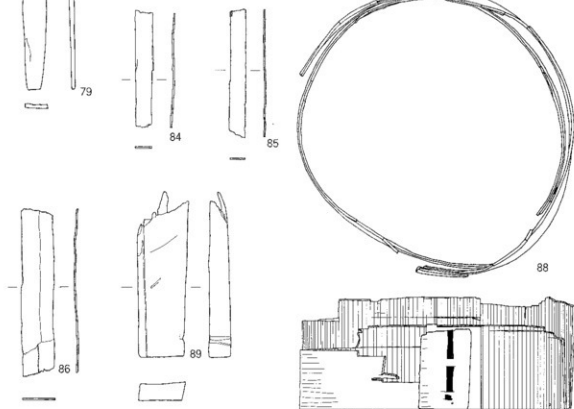


第15図 水橋上砂子坂遺跡出土遺物実測図(4) 木製品(1)

SD03 (78~87)



SK28 (88・89)



第16図 水橋上砂子坂遺跡出土遺物実測図(5) 木製品(2)

表4 遺物観察表

No.	遺構	種類	用途	口径 (cm)	高さ (cm)	深径 (cm)	色相		成形・装束		備考
							内面	外面	内面	外面	
1	SP11	特殊	すり鉢	3.9			黄灰色	黄灰色	コロンナテ	コロンナテ	
2	SK33	深黒蓋	鉢蓋	6.9			灰色	灰色			
3	SK33	中世土師器	鉢	3.9			にぶい黄褐色	黄褐色			内面に煤が付着。
4	SK18	磁器	(直径5.7)	7.4	2.9		黄褐色	黄褐色	ユビオサエ	ユビオサエ	内面に煤、外面に煤・油煙が付着。
5	SK21	中世土師器	蓋	10.0			黄褐色	黄褐色	ナテ	ナテ	
6	SK21	中世土師器	蓋	10.0			黄褐色	黄褐色	ナテ	ナテ	
7	SK22	特殊	すり鉢	21.9			黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
8	SK23	近代土師器	鉢蓋				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
9	SK23	中世土師器	鉢	5.4			灰色	灰色			
10	SK23	中世土師器	鉢	6.0	1.4		黄褐色	黄褐色	ナテ・ユビオサエ	ナテ・ユビオサエ	
11	SK23	中世土師器	鉢	6.0	1.4		黄褐色	黄褐色	ナテ・ユビオサエ	ナテ・ユビオサエ	
12	SK23	中世土師器	鉢	6.8			黄褐色	黄褐色	ナテ	ナテ	内面に煤が付着。
13	SK23	中世土師器	鉢	10.8			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			内面に煤が付着。
14	SK23	中世土師器	鉢	8.8			黄褐色	黄褐色	ナテ	ナテ	内面に煤が付着。
15	SK23	中世土師器	鉢	6.8	1.2		黄褐色	黄褐色	ナテ・ユビオサエ	ナテ	内面に煤・油煙が付着。
16	SK23	中世土師器	鉢	5.8	1.2		黄褐色	黄褐色	ナテ・ユビオサエ	ナテ	内面に煤・油煙が付着。
17	SK23	中世土師器	鉢	10.0			灰白色	灰白色	ナテ	ナテ	外側に煤が付着。
18	SK23	中世土師器	鉢	12.0			黄褐色	黄褐色			
19	SK23	特殊	鉢	23.8			灰色	灰色	コロンナテ	コロンナテ	
20	SK23	特殊	鉢				灰色	灰色	タタキ	タタキ	
21	SK23	特殊	鉢				灰色	灰色	タタキ	タタキ	
22	SK23	特殊	鉢				灰色	灰色	タタキ	タタキ	
23	SK23	特殊	鉢	9.0			暗赤灰色	暗赤灰色	コロンナテ	コロンナテ	
24	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
25	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
26	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
27	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
28	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
29	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
30	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
31	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
32	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
33	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
34	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
35	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
36	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
37	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
38	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
39	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
40	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
41	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
42	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
43	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
44	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
45	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
46	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
47	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
48	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
49	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
50	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
51	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
52	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
53	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
54	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
55	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
56	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
57	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
58	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
59	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
60	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
61	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
62	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
63	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
64	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
65	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
66	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
67	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
68	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
69	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
70	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
71	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
72	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
73	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
74	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
75	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
76	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
77	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
78	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
79	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
80	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
81	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
82	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
83	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
84	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
85	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
86	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
87	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
88	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
89	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	
90	SK23	特殊	鉢				黄褐色	黄褐色	コロンナテ	コロンナテ	

表5 木製品一覧表

No.	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形状	備考
70	SK18	板瓦	31.0	(直径)11.4×9.7		フナクノ瓦割ク	
71	SK33	板葺	27.9	(直径)14.8×12.5		フナクノ瓦割ク	
72	SK21	漆器蓋	18.0	(直径)7.3		イヌノ木ノ丸ノ木ノ蓋	内外面黒色塗布。内外面に「草文」赤褐色で書文。
73	SK22	土伏木製品	28.0	横大22		イヌノ木ノ丸ノ木ノ蓋	
74	SK23	漆器箱	(口径)8.5	(高さ)3.0	(幅)5.2	フナノ木	内外面黒色塗布。内外面に「花文」赤褐色で書文。外面は不明。内外面に「草文」。
75	SK23	漆器箱	(口径)12.5	(高さ)4.0	(幅)5.4	フナノ木	内外面黒色塗布。内外面に「草文」赤褐色で書文。外面は不明。上部が破損。
76	SK23	木枕	34.8	横大25.0		ヒノキノ木ノ口蓋	
77	SK23	木枕(板状木製品)	12.0	2.7	0.6	木蓋	片蓋型。木蓋型。
78	SK23	木枕(板状木製品)	21.9	7.9	0.2	ヒノキノ木ノ口蓋	
79	SK23	木枕(板状木製品)	24.9	2.3	0.5	スギノ木ノ口蓋	
80	SK23	木枕(板状木製品)	12.3	3.6	0.1	ヒノキノ木ノ口蓋	
81	SK23	木枕(板状木製品)	12.1	3.1	0.1	木蓋	
82	SK23	木枕(板状木製品)	19.7	4.0	0.2	木蓋	
83	SK23	木枕(板状木製品)	9.7	2.7	0.2	木蓋	
84	SK23	木枕(板状木製品)	12.5	1.8	0.1	木蓋	
85	SK23	木枕(板状木製品)	17.4	1.7	0.1	木蓋	
86	SK23	木枕(板状木製品)	17.8	3.2	0.1	ヒノキノ木ノ口蓋	
87	SK23	木枕(板状木製品)	22.6	9.5	0.6	ヒノキノ木ノ口蓋	横筋に溝が入れられ、片蓋型。
88	SK29	漆器(漆器)	(口径)4.0	(高さ)1.0	0.4	ヒノキノ木ノ口蓋	下部表面に「草文」赤褐色で書文。上部は黒色。横筋は直線。一線貫通。
89	SK29	漆器	17.1	4.9×3.4	1.8	木蓋	

iv) 理化学的分析

1. 出土漆器の塗膜構造調査

（株）吉田生物研究所

(1) はじめに

水橋上砂子坂遺跡から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

(2) 調査資料

調査した資料は、表1に示す中世～近世の漆器3点である。

表1 調査資料

No.	品名	樹種*	出土遺構	遺物No.	写真No.	概 要
1	漆器椀	トチノキ	SD01	72	1, 3	内外面とも黒色地に赤色で文様が施された椀。
2	漆器椀	ブナ	SD03	74	5, 7	内外面とも黒色地に赤色で文様が施された皿。
3	漆器椀	ブナ	SD03	75	9, 11	内外面とも黒色地に赤色で文様が施された椀。

*：樹種については、樹種同定報告を参照のこと。

(3) 調査方法

表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(4) 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表2に示す。

表2 断面観察結果表

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）			
				下 地		漆 層 構 造	顔料
				膠着剤	混和材		
1	漆器椀	内面 (文様部)	2	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
		外面 (文様部)	4	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
2	漆器椀	内面 (文様部)	6	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
		外面 (文様部)	8	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
3	漆器椀	内面 (文様部)	10	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
		外面 (文様部)	12	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱

塗膜構造：下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。3点とも塗膜構造はすべて同様であった。

下地：3点とも、茶褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地であった。

漆層：下地の上に、地色の漆、さらに文様部の漆、の2層の漆層が認められた。地色の漆は、黄褐色を呈する透明漆層である。文様部の漆は黄褐色の漆に赤色顔料が混和された赤色漆である

顔料：文様部の赤色漆には、透明度が高く明確な粒子形状を呈する朱の粒子が見られた。

(5) 結果

水橋上砂子坂遺跡から出土した中世～近世の漆器3点について、塗膜構造調査を行った。

3点とも内外両面が黒色地に赤色漆で文様が施された漆器であったが、その塗膜構造は同様であった。

木胎の上に、茶褐色の柿渋に木炭粉が混和された炭粉渋下地、その上に黄褐色の透明漆1層、朱を混和した赤色漆1層が観察された。このような塗膜構造は中世～近世の普及品の漆器によくみられる構造である。

木胎の樹種は、トチノキ1点とブナ2点であったが、この二種類の樹種は、中世～近世の漆器椀、皿によく利用される樹種である。

よって、今回調査した漆器は、塗膜構造ならびに樹種ともに中世～近世の普及品の特徴を示す漆器であった。

2. 出土木製品の樹種調査結果

榑吉田生物研究所

(1) 試料

試料は水橋上砂子坂遺跡から出土した容器（漆器、曲物）5点、文房具（木札）4点、建築部材（柱根）2点、土木具（弓状木製品）1点、用途不明品（木杭、炭化材）3点の合計15点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

No. 6、15は数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(針葉樹4種、広葉樹4種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus Harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(遺物 No. 4)

(写真 No. 4)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州(岩手以南)、四国、九州に分布する。

2) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物 No. 11)

(写真 No. 11)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

(遺物 No. 14)

(写真 No. 14)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

4) ヒノキ科アスナロ属 (*Thuopsis* sp.)

(遺物 No. 5, 7~10)

(写真 No. 5, 7~10)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(遺物 No. 2, 3)

(写真 No. 2, 3)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 110 \mu\text{m}$) がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柎目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

6) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物 No. 12, 13)

(写真 No. 12, 13)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管 ($\sim 500 \mu\text{m}$) が年輪にそって幅のかなり広い孔周囲を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柎目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

7) ニレ科エノキ属 (*Celtis* sp.)

(遺物 No. 6, 15)

(写真 No. 6, 15)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管 ($\sim 230 \mu\text{m}$) が数列で孔周囲を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綵状に配列している。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柎目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のもものと8~10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞(鞘細胞)に取り囲まれている。エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

(遺物 No. 1)

(写真 No. 1)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 80 \mu\text{m}$) が単独かあるいは2~4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく

年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1~3細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柱目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている（上下縁辺の1~2列の柔細胞に限られる）。板目では放射組織は単列で大半が高さ~300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様（リップルマーク）として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

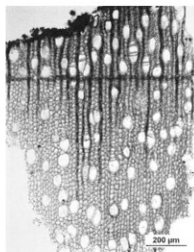
- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-F11

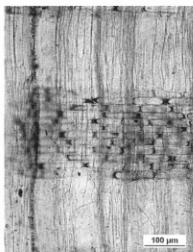
水橋上砂子坂遺跡出土木製品同定表

No.	遺物No.	遺構	品名	樹種
1	72	SD01	漆器	トチノキ科トチノキ属トチノキ
2	74	SD03	漆器	ブナ科ブナ属
3	75	SD03	漆器	ブナ科ブナ属
4	73	SD02	弓状木製品	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
5	76	SD03	杭	ヒノキ科アスナロ属
6	—	SD03	炭化材	ニレ科エノキ属
7	87	SD03	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
8	86	SD03	木札	ヒノキ科アスナロ属
9	80	SD03	木札	ヒノキ科アスナロ属
10	78	SD03	木札	ヒノキ科アスナロ属
11	79	SD03	木札	スギ科スギ属スギ
12	70	SK18	柱根	ブナ科クリ属クリ
13	71	SK33	柱根	ブナ科クリ属クリ
14	88	SK28 (SE01)	曲物	ヒノキ科ヒノキ属
15	—	SK07	炭化材	ニレ科エノキ属

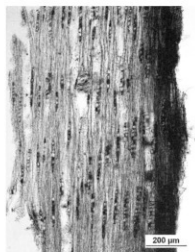


木口
トチノキ科トチノキ属トチノキ

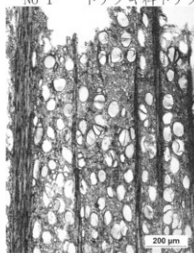
No-1



柁目



板目

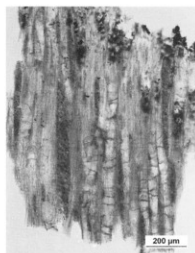


木口
ブナ科ブナ属

No-2



柁目



板目

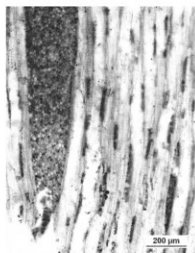


木口
ブナ科ブナ属

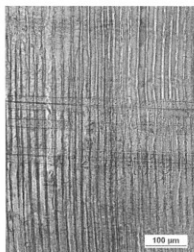
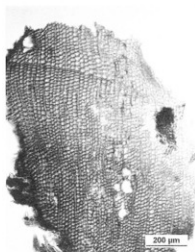
No-3



柁目



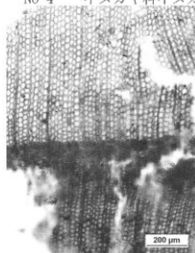
板目



No-4 木口
イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ

柁目

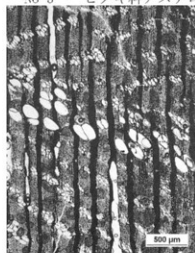
板目



No-5 木口
ヒノキ科アスナロ属

柁目

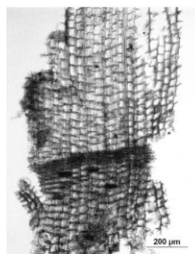
板目



No-6 木口
ニレ科エノキ属

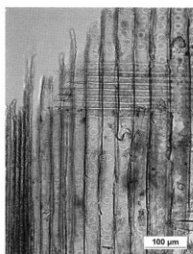
柁目

板目



木口

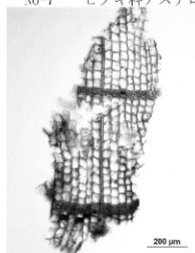
No-7 ヒノキ科アスナロ属



柁目



板目

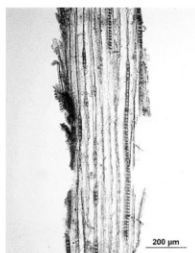


木口

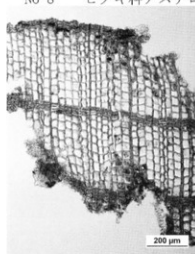
No-8 ヒノキ科アスナロ属



柁目



板目

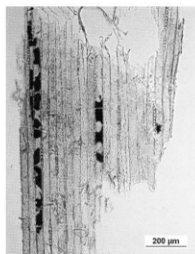


木口

No-9 ヒノキ科アスナロ属



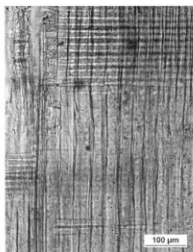
柁目



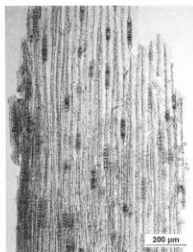
板目



木口
No-10 ヒノキ科アスナロ属



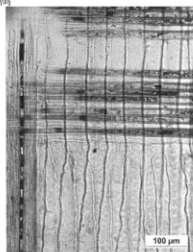
柁目



板目



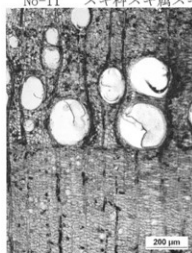
木口
No-11 スギ科スギ属スギ



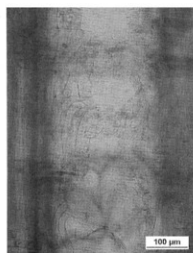
柁目



板目



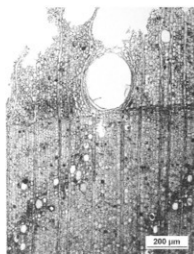
木口
No-12 ブナ科クリ属クリ



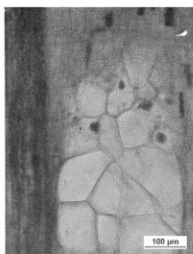
柁目



板目



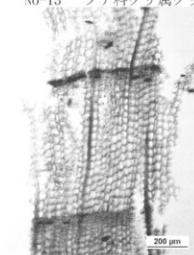
No-13 木口
ブナ科クリ属クリ



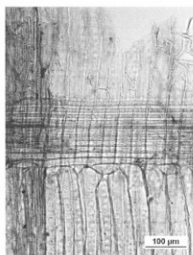
柁目



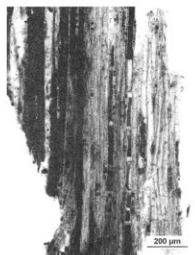
板目



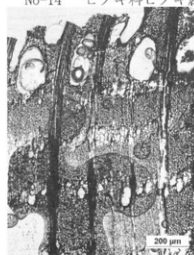
No-14 木口
ヒノキ科ヒノキ属



柁目



板目



No-15 木口
ニレ科エノキ属



柁目



板目

3. 放射性炭素年代測定

（株）吉田生物研究所

（1）はじめに

水橋上砂子坂遺跡より検出された炭化材1点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

（2）資料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

試料データ	前処理
試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：1.2N） サルファイックス

（3）結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $+1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

【暦年較正】

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP \pm 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP \pm 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
-24.84 \pm 0.14	350 \pm 19	350 \pm 20	1485AD (30.7%) 1522AD <u>1574AD (37.5%) 1626AD</u>	1463AD (42.9%) 1529AD <u>1552AD (52.5%) 1634AD</u>

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

◆参考文献◆

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3-20.
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Bertrand, C. J. H., Blackwell, P. G., Buck, C. E., Burr, G. S., Cutler, K. B., Damon, P. E., Edwards, R. L., Fairbanks, R. G., Friedrich, M., Guilderson, T. P., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R. W., Remmele, S., Southon, J. R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F. W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C. E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

4. 動物遺体(獣骨)の同定調査結果

徳吉田生物研究所

(1) はじめに

水橋上砂子坂遺跡より出土した動物遺体(獣骨)について同定を行った。

(2) 資料と方法

資料は2点である。同定作業は京都造形芸術大学の岡田文男教授の指導下で行った。

(3) 結果

調査結果を以下に示す。(表1と写真1~2)

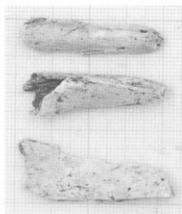
表1. 水橋上砂子坂遺跡出土の動物遺存体一覧表

No.	遺構	大分類	小分類	部位	部分	左右	写真No.
1	SK07	哺乳類	ヒト	大腿骨	骨端部近位端	—	No.1
2	SK07	哺乳類	ヒト	肋骨	—	—	No.2

写真



No.1



No.2

ⅴ) 総括

本調査区は、戦国時代から近世にかけての農村集落である。出土遺物や遺構の切り合い関係などから3時期の遺構が存在することが分かった。フィゴの羽口、鉄滓が出土しており、時期は不明であるが、小鍛冶を行っていたと考えられる。

I期以前

SD03に混在した土師器が9世紀後半代に位置付けられる。調査区の西約1.2kmの水橋専光寺遺跡においてこの時期の遺構が検出されており〔富山市教委2005〕、また、調査区の南約0.6kmに東大寺領「丈部荘」が推定されている〔藤田2001〕。今回の調査区では当該期の遺構は確認されなかったが、周辺に存在しているのかもしれない。

また、吉岡編年Ⅴ期（14世紀後半～15世紀中頃）に相当する珠洲が出土しており、その頃から周辺に集落が形成されたと考える。

I期（16世紀中頃）

この時期の遺構は、大溝SD03、Ⅱ期のSD04に切られているSD02が該当する。大溝SD03は、性格は不明であるが、数回に亘り掘り直しが行なわれている。SD03と繋がるSD02において、弓状木製品が出土している。水橋金広・中馬場遺跡で出土した同様の木製品は、魚を掛う網「タモ網」の用途が推測されており、白岩川流域村における漁労を兼業とする近世農村集落であると報告されている〔富山市教委2001・2006〕。狩猟神でもあり、転じて漁民にも信仰の厚い諏訪神社が調査区のすぐ北に鎮座しており、白岩川支流である番田川においても漁労を行っていたことが分かる。

Ⅱ期（16世紀後半）

この時期の遺構はSD01（新）・SD04・SD06を側溝とした道路跡SF01・SF02、道路側溝に平行するSD05・SD07が該当する。道路跡は調査区内で交わっていたと考えられる。道路区画内に側溝SD06に平行するように掘立柱建物SB01・SB02が建てられた。

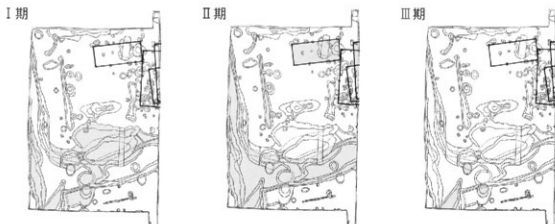
SK28(SE01)はSD07より新しく、この時期の遺構と推定される。

Ⅲ期（16世紀末～17世紀初頭）

この時期の遺構はSD08、SK02・SK03・SK06・SK07が該当する。直径1.2m以上の円形または楕円形を呈する大きめな土坑であるSK02・SK03・SK06は、周辺の水橋金広・中馬場遺跡、水橋専光寺遺跡などで数多く検出されている簡易な素掘り井戸の可能性はある。

SK07はⅡ期のSD06より新しく、理化学分析の結果から16世紀末～17世紀初頭の火葬跡である。周辺の立会調査でも火葬跡が確認されている。

（堀内）



第17図 集落変遷図

引用・参考文献

- ア 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編
宇野隆夫「10 井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社
越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988『越中瀬戸 発祥四百年記念誌』
- カ 上市町教育委員会 1984『北陸自動車道遺跡調査報告 ー上市木製品・総括編ー』
久々忠義 2001『弥生農村の風景と政治社会の誕生』『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- タ 立山町教育委員会 1994『稚児塚古墳ー第1次発掘調査報告ー』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2008「4 北陸新幹線開通遺跡発掘調査(2)本調査 ①水橋金広・中馬場遺跡 ②新堀内遺跡」『平成19年度 埋蔵文化財年報』
富山市教育委員会 1999『富山市水橋清水堂南遺跡、清水堂B遺跡』
富山市教育委員会 2000『富山市水橋清水堂南遺跡』
富山市教育委員会 2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2005『富山市水橋専光寺遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山市教育委員会 2007『富山市小出城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ ー水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・銀冶町遺跡ー』
富山県埋蔵文化財センター 1991『南中田D遺跡発掘調査報告』
- ハ 藤田富士夫 1998「東大寺領大蔵荘の現地比定と遺跡」『古代探求』中央公論社
藤田富士夫 2001「東大寺領越中国荘園「大蔵荘」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』135・136号 富山史壇会
舟橋村教育委員会 2001『富山県舟橋村仏生寺城跡発掘調査報告』
北陸中世土器研究会 1997『北陸の漆器考古学 ー中世とその後ー』
- マ 宮田進一 1997a「第4章第2節 越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史 北陸中世土器研究会編』梓書房
宮田進一 1997b「第4章第4節 越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史 北陸中世土器研究会編』梓書房
宮田進一 2007『越中瀬戸窯』『中世窯業の諸相 ー生産技術の展開と編年ー 補遺編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相 ー生産技術の展開と編年ー」実行委員会
森 隆 2003「富山県の中世土器(資料編) ー県東部・富山平野を中心とした地域におけるー」『富山考古学研究紀要第6号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森 隆 2005「富山県の中世土器(資料編2) ー道場I遺跡出土資料の検討と中名遺跡群出土資料の総括ー」『富山考古学研究紀要第8号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- ヤ 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

II 小竹貝塚

i) 調査に至る経緯

小竹貝塚は、富山市呉羽町北～高木地内に位置する縄文時代前期を主体とする貝塚遺跡である。貝塚の所在は、昭和20年代頃から知られており、過去には試掘調査・発掘調査が複数回実施されている。これによって、小竹貝塚の貝層は東西50m、南北150mに広がり、日本海側最大規模とされている。また、遺跡の中央を貫通する新鍛冶川承水路での採集活動や富山考古学会員による貝層試料の分類作業、自然科学的分析等によって遺跡の概要が明らかになってきている。

遺跡は昭和47年3月発行の『富山県遺跡地図』に登載され、平成5年3月発行『富山県遺跡地図（改訂版）』では埋蔵文化財包蔵地（市№201105）として周知されている。また、同時期に富山県教育委員会が実施した北陸新幹線建設に伴う分布調査で遺跡範囲はさらに拡張された。

平成20年7月24日、個人住宅建設（北陸新幹線建設に伴う移転）に先立ち、埋蔵文化財所在確認についての照会がなされた。建設予定地全域387.34㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年9月11日に市教委による試掘確認調査を実施し、調査対象地全域に遺跡の所在を確認した。調査では縄文時代の溝、土坑、弥生時代の土坑、ピット等を検出し、縄文土器、弥生土器、須恵器、古代土師器、石製品（凹石、磨製石斧）が出土した。

この調査結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、宅地部分の地盤改良工事及び擁壁の掘削工事が遺構面に達することから宅地部分と擁壁部分173.44㎡について発掘調査を行うこととなった。

発掘作業は平成21年2月2日から3月27日まで行った。表土掘削は2月2～3日にバックホウを用いて行った。表土除去完了後の2月4日から人力による包含層掘削及び遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査と並行して平成21年3月31日まで行った。

（堀内・鹿島）

ii) 遺跡の位置と環境

小竹貝塚は、富山平野の中央を南北に走る呉羽山丘陵の北端に広がる長岡台地の裾部から平野に至る沖積地、標高3.5mに立地する。富山市街地からは北西へ約4kmの距離にある。現在は海岸線より約4km内陸に位置するものの、約6,000～5,000年前の縄文海進の際に平野部まで広がっていたとされる旧放生津潟の縁辺に貝塚が形成された。呉羽山丘陵・旧放生津潟一帯は、旧石器時代から近世まで200か所ものぼる遺跡が所在し、富山市域の約3分の1が集中する遺跡の宝庫でもある。

縄文時代 縄文時代前期には、小竹貝塚の東約750mに、ほぼ同時期に形成されたとされる淡水産の貝を主とする蛸ヶ森貝塚が所在し、縄文時代前期の海進期には旧放生津潟が遺跡

近辺まで入り込んでいたと推定される。中期には、長岡台地上に集落が多く出現し、なかでも国史跡に指定されている北代遺跡は拠点的な集落で前葉から末までに約70棟以上の竪穴住居や数棟の掘立柱建物群が確認されている。北代遺跡の北西300mにある北代加茂下Ⅲ遺跡では前葉から中葉に小規模な集落が形成され、北陸では初の発見である柱列が二重に巡る形態の掘立柱建物跡が確認された。後期から晩期にかけては、長岡台地の北寄りに遺跡が分布するようになり、後期には長岡杉林遺跡から単独で竪穴住居が検出され、晩期には北代遺跡で掘立柱建物や墓地とみられる土坑、粘土探掘坑が検出されている。長岡八町遺跡では掘立柱建物や大型の土偶がみつかつており、中核的な集落が形成されていたと推測される。

弥生時代～古墳時代 弥生時代中期～古墳時代前期にかけては、海岸線に近い江代割遺跡・四方荒屋遺跡で大規模な集落が形成された。打出遺跡では、弥生時代終末期の焼失住居を含む集落がみつまっている。呉羽山丘陵北西の沖積地に所在する八町Ⅱ遺跡では、古墳時代前期から中期にかけての集落跡が確認されている。一方、呉羽山丘陵にはほぼ全域に古墳群が所在しており、呉羽山丘陵北端には、近年の調査で百塚遺跡や百塚作古遺跡から古墳時代初頭と推測される古墳群がみつかった。さらに初期の古墳群である杉坂古墳群や中期には前方後円墳である古沢塚山古墳が築かれ、後期においては番神山横穴墓群が確認されている。また、丘陵南西部には弥生時代の方形周溝群をはじめ、山陰地方との交流を示す四隅突出型墳丘墓を有する杉谷古墳群が築かれる。

古代 奈良時代から平安時代にかけては、長岡台地では壘田開発に伴う集落が一気に増加する。北代遺跡では、奈良時代を中心に竪穴住居や鍛冶工房等が検出され、呉羽小竹堤遺跡では奈良～平安期の大型掘立柱建物をもつ集落に鍛冶工房が伴っており、農村集落的側面の強い遺跡が確認できる。一方で、北代遺跡に隣接する長岡杉林遺跡では、平安時代中期の祀堂と推測される建物が検出された。瓦塔、緑釉陶器(椀・火舎)、灰釉陶器(椀)など仏教的色彩の強い遺物が出土しており、仏堂をもつ中核的な開墾集落と推定されている。これらの背景として射水郡寒江郷との関連が注目される。

中世 八町Ⅱ遺跡では、鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡からは掘立柱建物跡や井戸跡、畑跡などが確認されている。この八町地内を含む呉羽町、北代一帯は南北朝時代に京都下鴨社の神社領「寒江荘」に該当することから、荘園内の中核的な集落であったと推測される。また、現専龍寺を中心とした真言宗北代極楽庵寺の成立があり、周辺には数多くの中世石遺物の分布が確認されている。(宮崎)

引用・参考文献

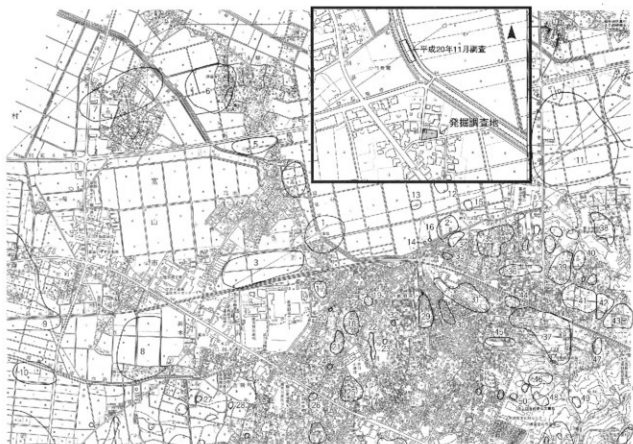
富山県教育委員会 1972 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

富山県教育委員会 1994 『史跡北代遺跡発掘調査概要』

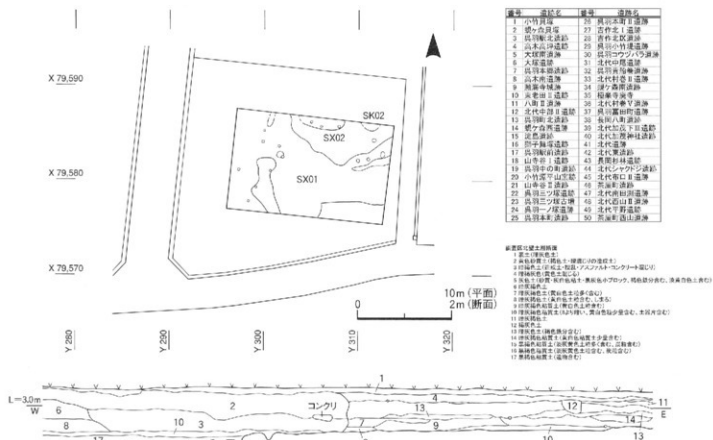
富山県教育委員会 2004 『富山県北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2008 『富山県八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

山内賢一・林寺殿州・小林高範・古川知明 1993 「小竹貝塚出土の遺物について」『富山県考古資料館紀要』第13号 富山県考古資料館



第18図 小竹貝塚と周辺の遺跡 (S=1/25,000)



第19図 発掘調査区遺構概略図 (S=1/400) 及び調査区北壁土層断面図 (S=1/80)

iii) 調査の概要

1. 調査概要

(1) 調査の方法

掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施した。平面図はトータルステーションによる計測を基本として 1/20 で作成し、必要に応じて 1/10 の微細図を併せて作成した。計測は測量機器（トータルステーション）を用いて図面記録を行い、公共座標（世界測地系）を使用した。写真撮影は必要に応じて随時行い、白黒 35mm、カラー 35mm フィルムに記録した。同年 3 月 19 日に RCヘリによる全景写真を撮影した。

(2) 基本層序

基本層序は上から I 層（表土・造成盛土）、II 層（暗灰褐色土、旧水田耕作土）、III 層（暗灰褐色～黒褐色の粘質土、遺物包含層）、IV 層（淡黄灰色地山）の順である。

2. 遺構（写真図版 12～15）

SK01(谷地形) 東西方向に延びる谷状の窪みを検出した。調査区東寄りでは浅く、西に向かって傾斜し、調査区北西端で深く落ち込む。谷状の窪みからは、多数の土器や石器が出土した。調査区東半部では、深さ 20cm 足らずの窪みにコンテナ箱にして約 50 箱もの遺物が出土した。縄文土器や石器、剥片、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、八尾焼、木製品などであるが、大半は、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器である。

SK02(竪穴建物) 調査区北壁に接し、調査区外へ続く。東西軸約 5m を測る。肩部は緩やかに立ち上がり、覆土中から磨製石斧や柱穴から縄文土器が出土した。同時期の遺構として、立山町吉峰遺跡の竪穴建物が知られる。

3. 遺物（写真図版 16～20）

縄文土器 縄文時代前期中葉～後葉を中心とした土器が出土している。蛸ヶ森 I 式土器と呼ばれ、II 縁部に隆帯を配し、胴部には羽状縄文を施す。爪形や木の葉形の施文もみられ、関東の諸磯 a 式や b 式の影響を受けている。他に中期や後期と見られる土器もある。

石器 磨製石斧、石匙、石鏃、石錐、石錘、凹石、石皿、玉類（玦状耳飾、飾玉）などがある。剥片が多数出土し、加工途中の製品もみられる。

弥生土器 有段口縁の甕、壺、高杯、器台、蓋などがあり、赤彩された土器もみられる。

また、ヒスイ・勾玉・未製品や玉砥石といった玉つくりに関連する遺物もある。

須恵器・土師器 須恵器は数は少ないが、杯 A、杯 B、蓋、瓶類がある。土師器には卑書の痕跡とみられるものを 1 点確認した。

iv) 総括

小竹貝塚の集落の南端を東西方向に横切る谷地形を検出した。出土遺物から縄文時代前期以外にも弥生時代後期～終末期にも集落が盛行したことを確認することができた。

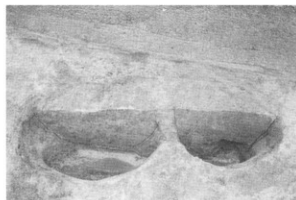
(鹿島)



掘立柱建物完掘状況（南から）



SP31 遺物出土状況



SP44・43 土層断面（西から）



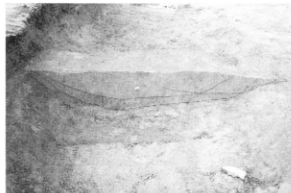
SK33 土層断面（南西から）



SK19 土層断面（南東から）



SD01 遺物出土状況（南から）



SD01 土層断面（南から）



SD02 完掘状況（北東から）



SD02 弓状木製品出土状況



SD02 土層断面（南から）



SD02・08 土層断面（南西から）



SD08 遺物出土状況（北から）



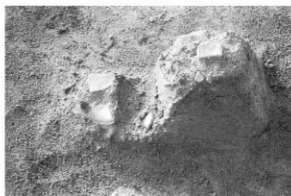
SD08 完掘状況（南西から）



SD04 遺物出土状況（東から）



SD04 完掘状況（東から）



SD04 遺物出土状況近景



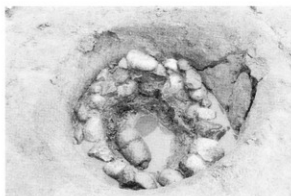
SD04、SK06・23 土層断面図（西から）



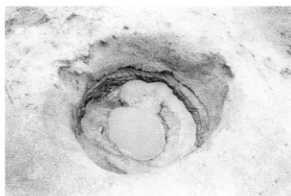
SK06 礫上部出土状況（西から）



SK06 礫下部出土状況（西から）



SK06 五輪塔出土状況（西から）



SK06 完掘状況（西から）



SD03 土層断面（西から）



SD03・06 完掘状況（南東から）



SD03 遺物出土状況（東から）



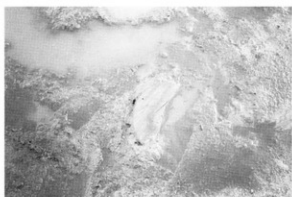
SD03 遺物出土状況近景（東から）



SD03 木製品出土状況近景（南から）



SD03 漆器出土状況



SD03 曲物底出土状況



SD03 木札出土状況



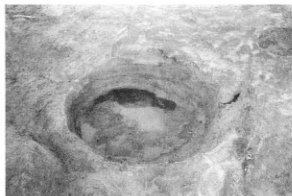
SD06 遺物出土状況（南から）



SD06 遺物出土状況近景



SK02 土層断面 (西から)



SK02 完掘状況 (西から)



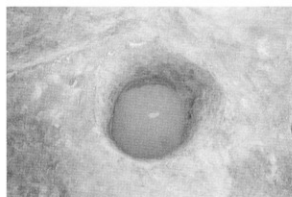
SK03 遺物出土状況 (西から)



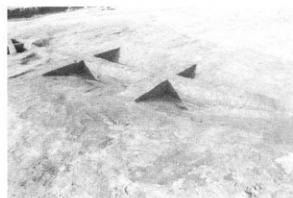
SK03 完掘状況 (西から)



SK03 土層断面 (西から)



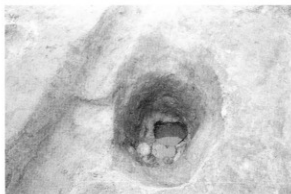
SK08 完掘状況 (西から)



SK25 土層断面 (南東から)



SK25 完掘状況 (西から)



SK28(SE01) 曲物出土状況(南から)



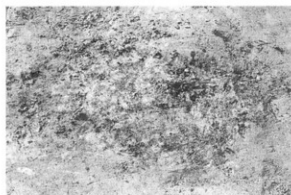
SK28(SE01) 完掘状況(南から)



SD07・SK28(SE01) 土層断面(南から)



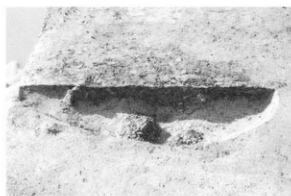
作業風景



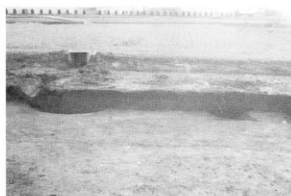
SK07 検出状況(東から)



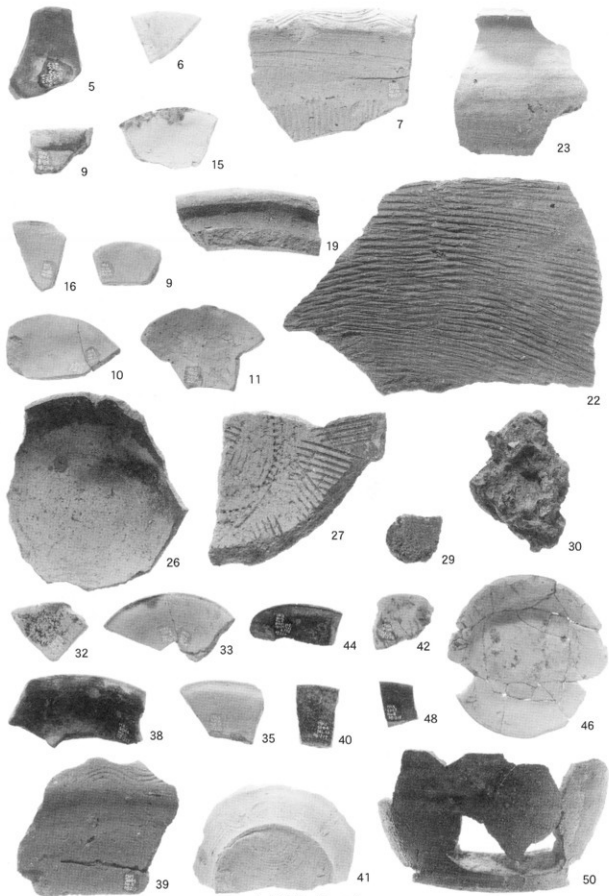
SK07 炭化材・骨出土状況(東から)



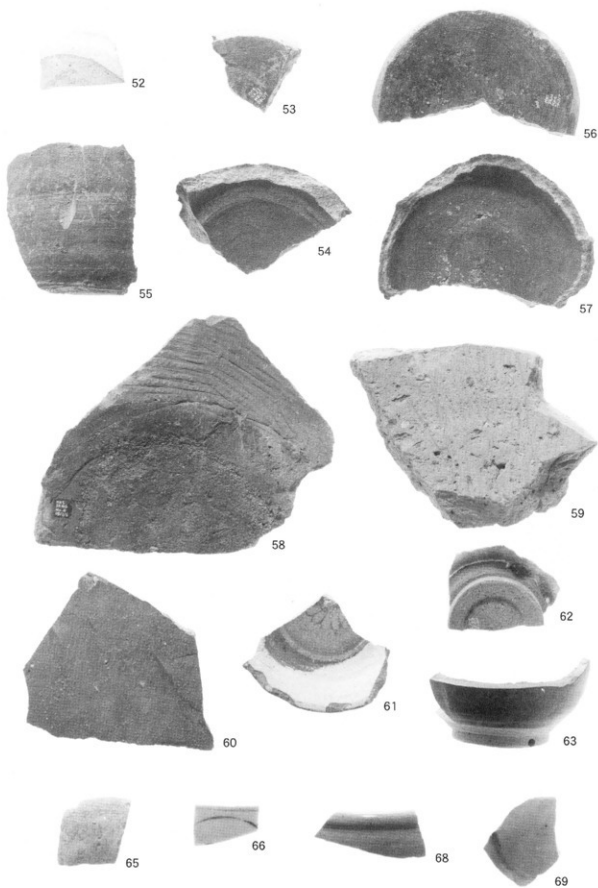
SK07 土層断面(東から)



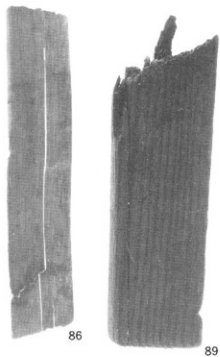
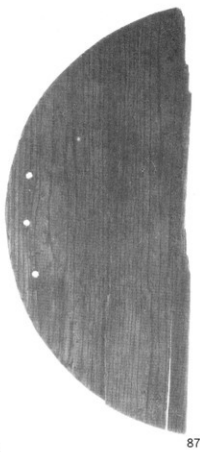
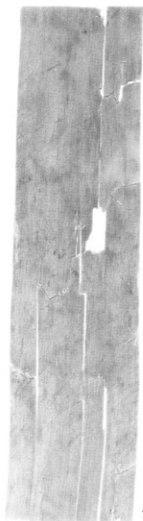
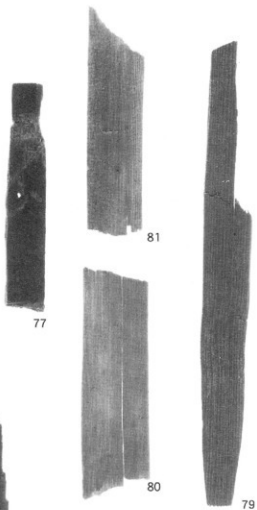
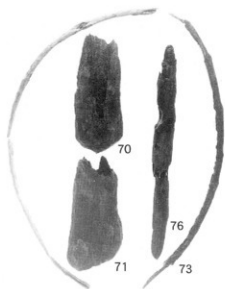
基本層序



出土遺物 (S=1/2)



出土遺物 (S=1/2)



出土木製品 (S=1/2, 70・71・73・76はS=1/10)



調査区遠景（東から）



調査区近景（上が南）



遺構検出状況（西から）



完掘状況（西から）



調査前（西から）



表土掘削（東から）



切羽出土状況（包含層）



遺構検出作業



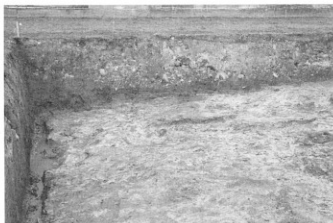
石鏃出土状況



須恵器杯出土状況



調査区西壁



調査区北壁



竪穴建物 (SX02)



SX02 内 石斧出土状況



SX01 土坑



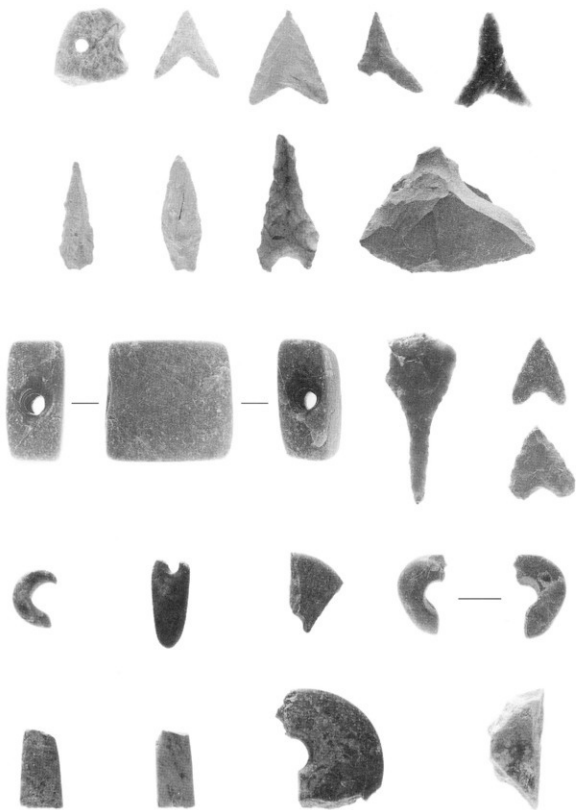
SX01 石製耳飾り



谷地形 (SX01) 遺物出土状況



谷地形 (SX01) 出土遺物 (S=1/2)



谷地形 (SX01) 出土遺物 (S=1/1)

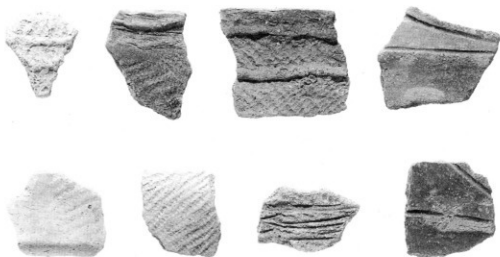


SX01

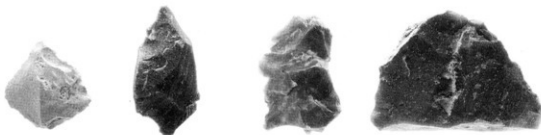
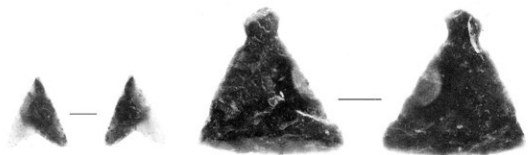
SK01

SX02

谷地形・土坑・竪穴住居出土遺物 (S=1/2)



(S=1/2)



(S=1/1)

包含層出土遺物



包含層出土遺物 (S=1/2)



谷地形 (SX01) 出土遺物 (S=1/2)

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはくつちょうさがいよう よん							
書名	富山市内遺跡発掘調査概要 IV							
副書名	水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	33							
編著者名	堀内大介・鹿島昌也・小林高太・宮崎琢也							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 Tel. 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2009年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
水橋上砂子坂遺跡	富山市水橋下砂子坂地内	16201	201256	36度43分30秒	137度20分10秒	20081121 ～ 20081225	366.90	個人住宅建築
小竹貝塚	富山市呉羽町北地内	16201	201105	36度43分10秒	137度10分10秒	20090202 ～ 20090327	173.44	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
水橋上砂子坂遺跡	集落	平安時代			須恵器、土師器			
		戦国時代	竪立柱建物・ピット・土坑・溝・道路・井戸		中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、越前、八尾、木製品(木札、曲物、漆器、弓状木製品、柱根、木杭)、石製品(五輪塔)、被熱礫			
		江戸時代	土坑・溝・ピット		越中瀬戸、伊万里、近世陶磁器、被熱礫、骨、羽口、鉄滓			
小竹貝塚	集落貝塚	縄文時代	谷地形、ピット、竅穴建物か		縄文土器(前期・中期・後期)、石器(磨製石斧、石鏃、石匙、石錐、凹石、珠状耳飾、飾玉、剥片)			
		弥生時代	谷地形		弥生土器(後期～終末期)、勾玉未成品、玉砥石、土製紡錘車?			
		古墳時代	谷地形		古式土師器			
		平安時代	谷地形		須恵器、土師器、墨書土器?			
		中世	谷地形		中世土師器、珠洲、八尾、瀬戸美濃、古磁、切羽			
		江戸時代			越中瀬戸			
要約	(水橋上砂子坂遺跡) 本遺跡は白岩川支流の番田川右岸に形成された集落跡である。今回の調査によって、戦国時代～江戸時代の集落跡が検出された。 戦国時代には、漁撈に関連すると考えられる弓状木製品が出土しており、番田川で漁撈を営んでいた。その後、側溝を持つ道路が形成され、その区画内に竪立柱建物が建てられていた。 江戸時代には、簡易な井戸と考えられる大きな土坑が掘られている。火葬跡も確認された。 また、フイゴの羽口・鉄滓が出土しており、小鍛冶が行われていたと考えられる。							
	(小竹貝塚) 今回の調査地は、本年度の新鍛冶川改修工事で貝層が見つかった地点から南へ130mに位置し、遺跡の縁辺部にあたる。貝層は、約6,500～5,000年前の縄文海進の際、平野部に広がっていた旧放生津潟の縁辺部に形成された。 調査では、縄文時代前期～中世の遺物が出土する東西方向の谷地形が検出された。谷地形から出土する遺物の主体は、弥生時代後期～古墳時代初期の土器であり、赤彩されたものもある。縄文時代の遺物には、各種石器やその未成品、剥片も多数みられ、集落内で石器製作を行っていたことが窺われる。弥生時代のヒスイ勾玉未成品や玉砥石も出土した。縄文時代の竅穴建物とみられる遺構も検出された。小竹貝塚の縁辺部にありながらも、様々な時代の営みがあったことを窺い知ることができた。							

富山市埋蔵文化財調査報告 33

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ

—水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚—

発行日：2009（平成21）年3月27日

発 行：富山市教育委員会

編 集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930 0091

富山市愛宕町1丁目2番24号

T E L : 076-442-4246

F A X : 076-442-5810

E mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷：中央印刷株式会社

